

目次

- 第百一話 日独伊三国同盟は、いとも簡単に締結された？
- 第百二話 官軍が始めた戦争を賊軍が終わらせた！
- 第百三話 暁部隊 陸軍の船舶部隊
- 第百四話 海軍陸戦隊、過酷な戦いで敢闘せり！
- 第百五話 大政翼賛会の功罪は？
- 第百六話 従軍看護婦の献身に感謝！
- 第百七話 日本における従軍宗教者
- 第百八話 挺身ではない挺進部隊（「身」ではなく、「進」）
- 第百九話 将校・下士官の急速育成が急務！
- 第百十話 野戦部隊指揮官、斯くありたし 宮崎繁三郎中将
- 第百十一話 満蒙開拓団、悲惨な逃避行！
- 第百十二話 新戦法創造力と対応力
- 第百十三話 建前と本音の戦場の性
- 第百十四話 窮余の一策、木炭自動車！
- 第百十五話 お粗末なシーレーン防衛！
- 第百十六話 不沈空母は画餅に帰した！
- 第百十七話 捕虜虐待、反日プロパガンダには毅然と反論を
- 第百十八話 厳しい状況下でこそ協同の実を！
- 第百十九話 建艦競争、消耗戦そして海軍消滅
- 第百二十話 精強無比の名も悲し、関東軍！
- 第百二十一話 サイレントネービーの苦悩と決意
- 第百二十二話 我が将兵の敢闘、此处にあり（５）後に続くものを信ず「若林大尉」
- 第百二十三話 宣戦はしないが、戦争はする！
- 第百二十四話 海軍○事件とは
- 第百二十五話 英米可分、不可分論争（日本の南方作戦構想に影響）
- 第百二十六話 忘れられた軍神（１）
- 第百二十七話 忘れられた軍神（２）
- 第百二十八話 戦争間に於ける戦没者の慰霊・顕彰
- 第百二十九話 陸軍の良心を体現 今村大将
- 第百三十話 水葬の島：メレヨン島
- 第百三十一話 精強な帝国陸軍師団も遂には案山子兵団と
- 第百三十二話 かつては戦友だった！（１）
- 第百三十三話 かつては戦友だった！（２）
- 第百三十四話 国民党軍の無道な作戦と日本軍の人道対応
- 第百三十五話 武士道精神の発露！敵国トップの死に哀悼の意
- 第百三十六話 ノブレス・オブリージュ
- 第百三十七話 至誠は通ず！
- 第百三十八話 烈々たる殉国の想いが我が国の名誉を守った
- 第百三十九話 戦友会の今とこれから
- 第百四十話 鉄道連隊：鉄道建設に任じた陸軍部隊

- 第百四十一話 米戦略家が摘出した日米戦決定過程の教訓
- 第百四十二話 台湾で神になった日本軍兵士
- 第百四十三話 文明の衝突？（ＢＣ級裁判、日吉事件）
- 第百四十四話 終戦直後に起きたこと
- 第百四十五話 ポツダム宣言と国体護持、そしてグルー前駐日大使
- 第百四十六話 リトルボーイ、ファットマン&パンプキン
- 第百四十七話 統一されていない「終戦」概念
- 第百四十八話 戦時徴用船と戦没船員
- 第百四十九話 第二の苦難！
- 第百五十話 一応の総括

第百一話 日独伊三国同盟は、いとも簡単に締結された？

日独伊三国同盟（1940/9/27 調印）締結に至る過程で、枢軸派には松岡外相、大島駐独大使（陸軍出身）、白鳥駐伊大使等、民間では徳富蘇峰、中野正剛、久原房之介、海軍では末次信正の各氏が居るものの、それだけで三国同盟に踏み切ったとも思えない。世論に後押しされ、或いは迎合しての面もあるだろう。そういう中でも陸軍が強力に推進した結果が三国同盟締結であると考えられているようだ。が、実態は少し違うとの論もある。陸軍は消極的だったというのである。

陸軍の関心事項は、対ソ軍備の充実であり、支那事変の解決である。張鼓峰事件やノモンハンの局地戦でソ連軍の戦力を痛感した陸軍は、対ソ戦備が整うまでは事を構える気はなかった。独との提携は対ソ牽制であり、当面北方静謐が狙いであった。独との同盟締結に当たって陸軍は、同盟の対象国としてソ連のみを考えていたが、対ソ限定では独も伊も乗ってこないの



で、英仏をも対象国に加えた。

対ソ戦の前に支那事変を解決する必要もあり、日独伊が連携することにより、援蔣諸国を牽制して対日戦勝利を断念させることが目的として考えられた。

また、この時期、独外相リッペンドロップの腹案と云われるものがあり、日本はこの腹案に則り、日独伊ソの四ヶ国の同盟を実現して、国際的地位の向上を図り、対米交渉を有利にしたいと考えた。

日ソ中立条約（1941/4/25）や独ソ不可侵条約（1939/8/23）もこの文脈で理解すれば容易である。独にとっては東の脅威を、日本にとっては北の脅威を極小化しようとしたのである。

勿論、三国同盟はその条文にある通り、世界新秩序建設のための血盟という意義はあるのだが、陸軍の考えをなぞってみると積極的に三国同盟を推進したいとの熱意が余り見られない。首陸海外の四相会議（1940/9/6）で、松岡外相から三国同盟を持ち出された陸軍（東条陸相）も海軍（及川海相）も初耳であった由である。幕僚レベルからトップに話が通ってなかった。東条陸相は直ちに同意し、及川海相は内心反対であったにも拘らず原則同意したとされる。斯様に松岡外相の主導によって電撃的に三国同盟締結へと歴史は急展開したのである。

人種差別主義者であるヒットラーは、心ならずも、日独提携により、米国を欧州面に戦闘加入させるのではなく、日本により、米軍を太平洋正面に拘束することを期待していたのだろう。

斯様に色々な思惑が交錯する中で、近衛首相は三国同盟締結を決意するのである。近衛首相は海軍が反対すると思ったとしているが、枢軸派に背中を押されての決断だったのだろう。時の及川海相は原則同意したという。内心は反対であるが、国際世論や情勢上それを強く主張し得ない雰囲気があった？

ターニングポイントの一つとも云われる三国同盟締結だが、何とも歯痒い気がする。消極的な陸軍、内心反対の海軍、一部狂信的な枢軸派の蠢動が作用して、しかも電撃的な締結となったような気がする。陸軍の中枢部に枢軸派が居たことは事実だとしても重大な国策決定が、いとも簡単に決められたようだ。内心反対だが、反対しにくかったとか、海軍が反対すると思っていたなどの言が出るのは日本的なのだろうか？

攻守同盟を締結するには、目的の確立と確固たる見通しが必要だが、それが曖昧模糊としている。抑々、三国同盟は軍事同盟なのか？陸軍にとっては、政治的な連携策以上ではなかったような気がする。

（第百一話 了）

第百二話 官軍が始めた戦争を賊軍が終わらせた！

文春新書 半藤一利編・解説「なぜ必敗の戦争を始めたのか 陸軍エリート将校反省会議」を読んだが、その「余話と補話—あとがきに代えて」に面白い個所があったので紹介しよう。以下同書 315p～316p を引用

『・・・、昭和 16 年 12 月に大日本帝国が対米英戦争をはじめる時の海軍中央の陣容を見ると、エッと驚くことがあるのです。何と薩長出身の対米強硬・親ドイツ派の連中で固められていたのです。永野軍令部総長の高知（土佐）出身を筆頭として、まず山口県（長州）出身は左の如し。

沢本頼雄海軍次官、岡敬純軍務局長、中原義正人事局長、石川信吾軍務第二課長、藤井茂軍務第二課員。

鹿児島県（薩摩）出身者も多いのです。高田利種軍務第一課長、前田稔軍令部情報部長、神重徳軍令部作戦課員、山本祐二同作戦課員、さらに大野竹二戦争指導部員も父親（伊集院五郎海軍大将）が鹿児島出身者でした。

第一委員会（筆者注：後述）のメンバーのほとんどが親独派の薩長出身、これに対して、対米協調派の強力トリオの米内光正が森岡、山本五十六が長岡、井上成美が仙台で、いずれも戊辰戦争のときの賊軍派出身の面々。これに加えて鈴木貫太郎も千葉県関宿の出身で賊軍派です。「“官軍”が始めた戦争を昭和の戦争を“賊軍”が終わらせた」といって、よく識者に笑われるのですが、あながち出鱈目をいっているわけではないのです。』

注：第一委員会とは、昭和 15 年 12 月 12 日、海相の認可を得て海軍中央に「海軍国防政策委員会」、略称「政策委員会」が設けられた。この政策委員会は 4 つの委員会により構成されており、その中心が、国防政策や戦争指導の方針を担当する第一委員会である。

委員には海大首席卒業の恩師の軍刀組も補職されている。メンバーには駐米経験者がただ一人しかいなかったという。（上掲書 312p から）

以下 Wikipedia による。

『主要なメンバーは富岡定俊（当時軍令部作戦課長、大佐）、大野竹二（当時軍令部、大佐）、高田利種（当時海軍省軍務局第一課長、大佐）、石川信吾（当時海軍省軍務局第二課長、大佐）の 4 人である。

軍令部の機密を扱うため作戦室を使用し極秘裏に審議したが、決定機関ではなく権限は極めて曖昧であった。非常に閉鎖的であり、例えば物資動員や出師準備の担当である軍令部第二部第四課長の栗原悦蔵元少将が自分も出席する必要がある旨主張し資料を抱えて会議に入ろうとしたら富岡定俊に「あなたは入る必要がないんだから」と制止されたという。権限がないため過激であり、しかし永野修身（当時軍令部総長）は会議の席でも居眠りし作戦計画に鋭い指摘を飛ばすこともなく、「これは第一委員会でパスしたのか？」

「よかろう」と第一委員会の報告書を無批判に採用し、1941 年には海軍の政策決定はほとんどこの委員会の下固めにより進んで海軍は一気に開戦に向けて動くこととなり、これにつき鳥巢健之助（元中佐）は海軍反省会でこの委員会が「むちゃくちゃに戦争に持って行った」「魔性の海軍」と強く批判している。』

* 鹿児島出身の小生としては心苦しきところ大であるが…

* 陸軍はドイツ式の軍制を取り入れており、親独が多いのは解らないでもないが、海軍側にも、枢要な部署に斯くも多くの親独派が居たことは驚きでもある。米英或いは独の何れと協調・提携するかの国家百年の大計を見失ってはならない。現代においても同様だ。自由主義国際社会の一員として振る舞うか、覇権を目指す国家に近づいてお零れに与らんとするか何れが真つ当なるか自明であるとは思う。

（第百二話 了）

第百三話 暁部隊 陸軍の船舶部隊

海軍に陸戦隊があったことはよく知られているが、陸軍に暁部隊との美称で呼ばれる船舶部隊があったことは意外に知られていない。

1 船舶司令部と暁部隊

船舶司令部は、戦時における軍隊・物資等の船舶輸送を指揮統率した陸軍の組織である。船舶司令部が統括した陸軍船舶部隊は、各隊に与えられていた通称号の兵团文字符「暁」から「暁部隊」と通称された。最大約 18 万人の将兵が在籍した。

2 沿革

1904 (M37) 年 4 月 陸軍運輸部設置 (台湾陸軍補給廠の改編)

1937 (S12) 年 8 月 第 1 船舶輸送司令部が動員 (司令部を広島県宇品)

司令官は陸軍運輸部長が兼務し、運輸部が平時業務を、輸送司令部が戦時業務

1940 (S15) 年 6 月、船舶輸送司令部を臨時編成し、大泊・小樽・東京・新潟・敦賀・大阪・神戸・門司・釜山・羅津・大連・高雄に支部を設置。司令官変わらず。

1942 (S17) 年 7 月 船舶輸送司令部を船舶司令部に改編

船舶部隊の改編も行われ、第 1 船舶輸送司令部 (大本営直轄)、第 2 船舶輸送司令部 (中国方面)、第 3 船舶輸送司令部 (南方方面)、及び上陸作戦部隊を統一した組織として船舶兵团を新たに編成した。

1942 (S17) 年 11 月、第 4 船舶司令部 (ソロモン諸島・ニューギニア島方面)

その後、第 5 船舶司令部、第 7 船舶司令部が編成された。

1945 (S20) 年 5 月には、新設された大本営海運総監部が全船舶を国家船舶として一括管理することになった。

3 船舶工兵から船舶兵

従来は、上陸用舟艇等の船舶兵器を実戦において運用していたのは工兵 (「船舶工兵」・「上陸工兵」と呼称) の一部であったが、1943 年 (昭和 18 年) に船舶兵として独立した兵種となった。



4 保有船舶等

揚陸艦・機動艇・装甲艇・駆逐艇・高速艇甲/乙・潜航輸送艇等多様な船舶を保有

大型の揚陸艦の操船は民間海運会社からの派遣船員 (軍属) が中心、船舶兵は自衛武装や搭載舟艇、対潜哨戒機の運用を担当していた。なお、機動艇以下の中小型艇や上陸用舟艇等は船舶兵自身が操船を行った。船舶兵は手旗信号などに通暁していた。

船舶の自衛武装操作のため、船舶砲兵連隊が編成され、必要に応じてその一部が各陸軍軍用船に「船砲隊」として乗船することになっていた。各種火砲のほか対潜用の爆雷や迫撃砲の運用も行った。

5 原爆投下と船舶司令部・暁部隊

1945 (S20) 年 8 月 6 日の広島市への原子爆弾投下で壊滅またはそれに近い被害を受けた軍部隊や官公庁が機能停止に陥った。爆心地から 4km 前後離れていた宇品に駐屯し大きな被害を受けなかった船舶司令官 (佐伯文郎陸軍中将) が、翌 7 日以降「広島警備本部」として市内の救援活動や警備活動の指揮をとることとなり県庁・県防空本部を指揮下に入れた。麾下の暁部隊は市内での活動に総動員され、これに従事した部隊員の中から多くの二次被爆者を出すことになった。被害を受けた広島電鉄の復旧のため、部隊が所有していたマスト 300 本が電柱として利用された。

* 海軍には海軍陸戦隊があり、日本では第三の軍種 空軍及び海兵隊の発想はなかったのか? あったとしてもその実現には至らなかったのだろう。

第百四話 海軍陸戦隊、過酷な戦いで敢闘せり！

寡聞にして知らなかったが、明治初期（3～9年）には海軍に海兵隊が置かれていた。「強行移乗による制圧は時代遅れである」との理由で廃止された。その後、作戦上の必要性により陸戦隊が編成された。その陸戦隊には二種あり、海軍陸戦隊と特別海軍陸戦隊である。

1 海軍陸戦隊

必要に応じて一般の水兵を武装させて陸上戦闘に充てることがあり、これは海軍陸戦隊と呼ばれた。海軍陸戦隊は常設でなく、艦艇の乗組員から必要に応じ陸戦隊を臨時に編成するものとされた。西南戦争、日露戦争、第一世界大戦に参加し、また二・二六事件の際は、地域警備を担当した。列国の海兵隊同様、清国、中華民国における在外公館や居留民の保護に海軍陸戦隊が活躍した。義和団の乱、1920(T9)年の尼港事件(赤軍パルチザン部隊が邦人約6000名を虐殺)では全滅するまで戦い、在留邦人と運命をともにした。第一次上海事変では上海陸戦隊が編成され大規模な戦闘に投入された。他に、警備隊や防空隊等の陸戦隊が編成された。海軍独自の落下傘部隊は1942(S17)1月セレベス島メナドで日本初の落下傘降下作戦を敢行した。終戦前には本土決戦に向けて艦艇部隊などの多くが陸戦隊に改編され、総兵力は10万人に達していた。

2 特別陸戦隊

鎮守府などの陸上部隊の人員で地上戦闘部隊を作ることもあり、特に特別陸戦隊と呼んだ。建前は、臨時に編成される特設

上海事変を受けて1932年には「海軍特別陸戦隊令」が制定され、上海海軍特別陸戦隊は正式な常設部隊となった。5年後の第二次上海事変でも、上海海軍特別陸戦隊を中心に多数の陸戦隊が戦った。

特別陸戦隊にも二種あって、上海海軍特別陸戦隊の他に、「特設鎮守府特別陸戦隊」と呼ばれる部隊がある。この部隊は、上陸作戦や占領地の守備に任ずる専門の陸戦隊として運用された。戦争中には、目標地点占領後に、固定的な警備隊や根拠地隊へ改編されたものも多い。特設鎮守府特別陸戦隊は、戦争終結時には連合特別陸戦隊11個と特別陸戦隊54個が存在した。

特設鎮守府特別陸戦隊は、司令は中佐、モデル的編制は、本部中隊と銃隊2個中隊（各小銃4個小隊と機銃小隊）及び特科隊からなる歩兵大隊相当の編成であるが、実際の編制はかなり多様である。1000～1500人規模の例が多かった。中には砲兵隊や戦車隊、海軍空挺部隊としての編制をとるものもあった。装備は陸軍と共通だったが、仕様が変更された装備もある。教育は砲術学校で行われた。服装はセーラー服、状況に応じてカーキ色に染め直し最後は陸戦隊用被服が支給された。



特別陸戦隊配属は予備役など高齢者や身体能力に劣る者が中心で、人員の素質の面では優れているとは言えないとされる。上海海軍特別陸戦隊は、鎮守府所属ではなく上海に駐留するために編成された官衙たる常設部隊である。司令官は少将か大佐、複数大隊編制で特別陸戦隊と比べ大規模である。人員は各鎮守府から派出された。

参加作戦名：ウェーク島の戦い、メナドの戦い、ラビの戦い、ブナ・ゴナの戦い、ラエ・サラモアの戦い、ニュージョージア島の戦い、フィンシュハーフェンの戦い、タラワの戦い / マキンの戦い、マニラの戦い、硫黄島の戦い、沖縄戦

* ロートル部隊(失礼)とは言え、陸軍と同様の厳しい作戦に従事したものだ后感嘆する。日本人の殉国精神の発露であり、敢闘精神を讃えたい。

第百五話 大政翼賛会の功罪は？

昭和初期の政友、民政二大政党制を経て、超然内閣といわれる内閣が誕生し、次第に新党運動に収斂していった。新党運動は近衛を担ぎ出すことを目算していた。一方、「革新官僚」や「少壮軍人」がこの新党運動に関心を持ち始めた。一方、欧州正面ではナチスが台頭し、ナチス流の国民再組織があり、国家総力戦の立場から陸軍はそれを歓迎した。その集大成というか、行きついた先が「大政翼賛会」である。

1 大政翼賛会に至る重要人物の登場

(1) 陸軍軍務局長武藤章

陸軍の政治担当部局は陸軍省軍務局であり、その局長に武藤章少将が任命(1939/9/30)された。武藤は“この重大な局面を開く内閣が欲しい”その首班には近衛氏が望ましいと考えていた。

(2) 肅軍演説(1936(S11)年5月7日)二・二六事件の戒厳令下

民政党の斎藤隆夫が、支那事変処理を批判して、戦争目的とする東亜新秩序建設の理念に疑念を表明した。この演説は物議を醸し、斎藤代議士は除名され、この問題を切掛けに超党派の「聖戦貫徹議員連盟」(1940/3/25)が結成された。

(3) 各種政治団体の結成

革新右翼：①聖戦貫徹議員連盟 ②東亜建設国民連盟

観念右翼：純正日本主義の各種政治団体

(4) 近衛氏の登場

これらの運動の象徴的存在であった近衛は、「新党」との言葉を避け、「政治新体制の確立」を掲げて、衆望を担って遂に立ったのである。

基本となる政策は、①国防国家の建設、外交の伸長との陸軍の政策の基調を取り込む
②国務及び統帥の結合を図るため、最高国防会議の設置を企図する。
当初は軍部を抑え込む狙いがあったが、軍部の革新勢力協力するものへと変質していった。

2 大政翼賛会の概要

1940(S15)年10月12日に第2次近衛文麿内閣によって、新体制運動を推進するために創立された。これは近衛が中心になって進めてきた新体制樹立運動の結実であり、総力戦争を遂行するために一党独裁制を実現させようとしていた軍に対し、国民各層の有力な分子を結集して軍に対抗できる強力な国民組織をつくらうとしたものであった。

当初は、一党独裁の形態はとられたにもかかわらず、近衛の思惑を外れて、政府に指導される公事結社として、道府県支部長は地方長官の兼任となり、行政補助機関のようなものとなった。

東条英機内閣では国民統制組織としての色彩を強め、42年4月には翼賛選挙に協力し、6月にはそれまで各省の監督下にあった産業報国会、大日本婦人会などの諸国民組織運動を傘下に統合した。45年6月に、鈴木貫太郎内閣のもとでの国民義勇隊創設に伴い、解体、吸収された。

* 全体主義、軍国主義と批判することは容易い。然し、国家総力戦時代にあつて、如何にして国家の力を結集するかは重大関心事項だ。国民の自発的協力が得られないような国家は消滅するしかないのだろうか？非常時には非常時なりの方策があつて然るべきではないだろうか？そろそろ国家緊急事態への対処について冷静な議論をすべき時に至ったのではなかろうかと愚考する次第である。



第百六話 従軍看護婦の献身に感謝！

最近でこそ、男性の看護師も居るが、戦前看護婦は女性の花型職業であった。その看護婦たちも戦争と無縁ではなかった。日本の従軍看護婦制度を概観して、大東亜戦争間における彼女等の活動を簡単に紹介する。

1 日本の従軍看護婦制度

- (1) 1890(M23)年4月日本赤十字社看護婦養成所に10名が入所(1期生) 養成期間3年 卒業後20年間応召義務(爾後応召義務年限は15年、次いで12年へと短縮)
平時：日赤病院その他に勤務、戦時招集：戦地に出勤
- (2) 1894(M27)年 初の招集陸海軍病院に配置 マスコミが壮挙を讃えた。叙勲も
- (3) 1901(M34)年日赤条例改正：軍の衛生勤務の幫助、命令服従、待遇(下士官、兵)
- (4) 1904(M37)年：日露戦争 2160名従軍(うち3名犠牲病死)靖国神社に合祀
- (5) WW I、シベリア出兵 病院船乗組、外地勤務
- (6) 1919(T8)年平時の陸軍病院(東京衛戍病院)で「看護婦試験採用 評判良く翌年から陸軍衛戍病院で看護婦採用(陸軍看護婦と称す) 当初は日赤卒業生のみであったが、後一般の看護婦資格者も採用 待遇は軍属(部内限り) 婦長伍長相当、看護婦二等兵相当
- (7) 支那事変勃発後 看護婦のニーズ高まり→日赤養成期間2年半に
- (8) 日米開戦後(1942) 従来からのものを甲種、速成コースとして乙種を設け、採用年齢の引き下げ(18歳から16歳に)

2 大東亜戦争における従軍看護婦

(1) 派遣人員等

日赤の記録では、延べ33,156人が動員、その他日赤以外等の動員数は不明

- (2) 派遣班数(班は婦長1名、看護婦10名が標準とする資料もあれば、医師1名、婦長1名、看護婦20名、書記・仕丁各1名との資料もあり、多様だった?)



内地666班、支那114班、満州55班 他の資料では、最終的に960班

- (3) 派遣地 北は樺太から南はジャワ、東はラバウル、西はビルマ迄
- (4) 配置病院 日赤：兵站病院までの衛生施設、陸海軍看護婦：後方の陸海軍病院 野戦病院等は軍の衛生部隊担当
- (5) 犠牲者数：日赤看護婦1,120名 (合掌)
- (6) 活動状況等

- ・戦況有利な場合は比較的安全に活動
- ・満州等では現地民による襲撃もあり、病院外には出られなかった。
- ・フィリピンやビルマ：戦況悪化に伴い病院も爆撃対象となる(防空壕等避難)
- ・飢餓とマラリアに苦しみ、ジャングル内を彷徨
- ・ひめゆり学徒隊の悲劇
- ・看護婦が外地に動員されたので、国内は看護婦生徒が主力となる。
- ・需要の急増により質の低下も見られ、経験のない者が多くなった。
- ・人道博愛と報国恤兵(じゅっぺい) 捕虜となるを肯じえずして自決する者も
- ・僅かな医療材料で大量の看護(1000人/4名の看護婦)
- ・助けられた命も、必要のない苦痛に苦しむ兵を悲痛な想いで見守るしかない場面
- ・満州におけるソ連の蛮行(第二十話参考)

* 赤十字は戦争を前提とした組織であるとはいえ、看護婦の献身的な看護で多くの将兵が救われたことであろう。また、救いたくとも切歯扼腕する場面も多々あったと思われる。彼女等の献身に感謝の念を捧げる。

第百七話 日本における従軍宗教者

従軍看護婦からの連想で、従軍僧（宗教者）は居ないのだろうかと気になり、調べてみた。制度的なものは従軍神職制度（939(S14)年制定）があるのみである。

古来より、戦いは命のやり取りであり、戦争に従事する者の魂の救済は必要不可欠であり、また死者の供養も重要であった。欧米諸国では、旧約聖書の時代から戦いに司祭・牧師等が参加しており、現在はこの聖職者を一般にチャプレンという（厳密には military chaplain）と呼んでいる。日本では、陣僧と呼ばれる僧が存在し、室町時代、軍陣に同道して、戦死者の供養をはじめ文書作成や敵方への使者を務めた。戦国時代にも一流の知識人であった高僧が参謀的役割を担い、使僧として行動した。

1 欧米諸国

遅くとも4世紀のローマ帝国軍には既に存在していたとされる。公式には、742年にレーゲンスブルクの会議で聖ボニファティウスが従軍牧師の職務を軍務として認めたことに始まる。従軍牧師は軍人ではあるが衛生要員と同じく中立として扱われ、このことは1864年のジュネーブ条約第2条でも規定され、保護される。一般的には士官相当

2 日本（～1939(S14)頃迄）

日本軍においては、従軍僧（仏教）が存在したとされるが、軍人ではなく軍属扱いであった。浄土真宗各教団においては軍隊布教使と呼ぶ布教使を派遣している場合もあった。また、日本軍では聖職者でも一般人と変わらず徴兵の対象とされたので、神職や僧侶の資格を持つ軍人が、臨時に従軍神主や従軍僧のような役割を行う場合があった。

- (1) 従軍布教活動（各宗派の従軍僧派遣目的は布教活動だったのか？）
- (2) 日蓮宗の日清・日露戦争における物資の補給、戦死者の供養、病院慰問等
- (3) 浄土真宗、臨済宗（日清戦争 非戦と平和の宣言文に関する総長談話）
- (4) 真言宗派遣従軍僧（日清戦争）
- (5) 浄土真宗

日露戦争においては、日清戦争を遥に越える規模の従軍僧を派遣した。従軍僧は、宣戦詔勅や法主のことばを基準にして法話・説教を行い、“この戦争が仏教の殺生戒とは矛盾しないこと、平和のための戦いであること、慈悲の精神から捕虜や非戦闘員を助けるべきこと、そして恐怖心が湧いた時は南無阿弥陀仏を唱えよ、国家のために死ぬのは名誉であり、靖国神社に祀られるのは身に余る幸せである”等と説いた。

(6) 念仏師団

真宗門徒の多い石川・富山・福井の3県の連隊から構成される第9師団は、有名な旅順総攻撃で一斉に「南無阿弥陀仏」と唱えながら呐喊したと伝えられている。

3 従軍神職制度の創設

1939(S14)年8月、陸軍省は「従軍神職制度」を定め、その定員は師団に3名、兵站監に2名、独立旅団に1名とした。従軍神職は、これまで応召中の軍人神職や慰霊使によって執行されてきた戦闘後の慰霊祭等に奉仕することであった。広東、南京、済南、北京等の各地で、戦没者の為の大規模な慰霊祭が営まれた。

4 近代国家以降について云えば、日本と欧米諸国では、従軍に関する考え方に大きな差異があるような気がする。日本は死者を弔うことに力点があり、欧米では生前の心の平安を重視していたような気がする。

日本軍における魂の救済 戦死した際には英霊として靖国神社に祀られるということが、戦争参加将兵の魂の平安に繋がっていたのだろう。英霊となって、永遠の命が得られるとの確信があったのだろう。或いは、八百万の神信仰と何か関係があるのだろうか？使命感のみでは物足りないものを何に求めるべきなのだろうか？

第百八話 挺身ではない挺進部隊（「身」ではなく、「進」）

テイシintaiと云えば、某国が従軍慰安婦=女子挺身隊と悪意ある誤解を取らせてしていることを思い出すが、本話のテイシintaiは、大東亜戦争末期に帝国海軍が編成した海上挺進部隊と帝国陸軍の陸軍海上挺進戦隊について述べる。

1 海上挺進部隊(KTB)

海上挺進部隊は、連合艦隊（海軍総隊）によって1945(S20)年5月20日に編成(司令官は少将)された、日本海軍の組織的行動が可能な水上艦部隊である。第三十一戦隊と第十一水雷戦隊を束ねた軍隊区分である。

大型艦艇が相次いで撃沈、大破、燃料不足等で航行不能となっていた状態の中、間近に迫っていた本土決戦に向けて編成された。主任務は邀撃奇襲作戦と輸送作戦であった。連合軍の本土上陸作戦が開始された場合は、決号作戦において上陸中のアメリカ軍を奇襲攻撃する。しかし、戦隊は燃料不足の為に合同で訓練を行なうこともできず、呉港あるいは柳井付近の擬装泊地に繋留したまま、已むなく停泊訓練を行なうのみであった。日本の降伏により、海上挺進部隊が出撃する機会は無かった。

決号作戦時の攻撃方法は、母艦搭載した人間魚雷回天を発射することを第一義とした。回天発射後、搭載母艦自らも砲雷撃を加えることとされていた。作戦要領としては主として夜戦によるものとし、内海西部の祝島を中心とする行動半径180海里圏以内とされた。各駆逐艦は回天を1-2基、戦隊旗艦である駆逐艦花月と戦隊中最大の艦であった軽巡洋艦北上は8基を搭載し、できるだけ来攻敵部隊に近接して回天を発進させたのち、上記の通り挺進部隊は主として敵輸送船団に砲雷撃を加えることとされた。

2 陸軍海上挺進戦隊

大東亜戦争中に日本陸軍が編成した特攻艇部隊である。水上挺進隊と呼ばれることもある。小型戦闘舟艇である四式肉薄攻撃艇（マルレ：連絡艇の頭文字レに○の秘匿名称）を装備した。マルレは、当初は搭載した爆雷を投下して攻撃する計画だったが、実際には、しばしば体当たりする特攻兵器として実戦に投入された。

1944年（昭和19年）7月16日に、陸軍内で海上特攻研究班が設置され、マルレ艇による攻撃部隊の研究が始まった。そして、同年8月に小豆島船舶幹部候補生隊で海上挺進第1-10戦隊が仮編成され、さっそく訓練に着手した。これら10個戦隊は、同年9月1日以降に広島県の江田島幸の浦で編成完了した。

爾後逐次に戦隊が編成され、第41-53戦隊も編成が進められたが、第51戦隊と第52戦隊が完了したのを除き、仮編成されての訓練途上で終戦を迎えた。

1個戦隊は本部と3個中隊（各マルレ30隻）から成り、中隊は本部と3個群（各マルレ9隻）から成っていた。1個戦隊の兵力は、戦隊長以下隊員104名とマルレ100隻、自衛兵器として短機関銃4挺と拳銃を保有した。人員は、陸軍士官学校第51-54期出身の少佐・大尉を戦隊長とし、中隊長は陸士57期の中尉・少尉が中心、群長（小隊長）以下の幹部は学徒出陣の船舶幹部候補生や陸軍予備士官学校出身者などが充てられた。一般隊員は未成年で志願した船舶特別幹部候補生であった。幹部を含め16-25歳程度の若い将兵だけで構成された。

編成された部隊のうち第30戦隊まではフィリピンや沖縄、台湾などに配備された。ルソン島の戦いや沖縄戦では実戦に参加した。マルレを消耗した後は、陸上戦闘に協力した。後半に編成された第31戦隊以降は訓練完了次第、本土決戦に備えて日本各地に展開した。もともと日本陸軍は、上陸用舟艇の大発や特殊船と称する揚陸艦など、艦船部隊を豊富に有していた。このように海へ深くかかわった日本陸軍であったからこそ、通常なら海軍が所管するような突撃艇部隊を編成できたと考えられる。

第百九話 将校・下士官の急速育成が急務！

支那事変が、不拡大方針にも拘らず拡大し、日米英蘭戦も惹起し、日本軍の所要人的戦闘力が拡大し、特に将校、下士官の絶対的不足は、作戦遂行に深刻な支障を来した。これに対処するために、新たな人事制度を創設し、或いは既存制度が改正され、また教育制度についても見直しが迫られた。

戦時所要の増大に伴う陸軍の幹部（将校・下士官をいう）の採用及び育成等を概観する。海軍においても同様な状況だろう。否、技術的な習得が多い海軍の場合は、状況はより深刻だったのではないかと思料する。平時から十分な予備選力を保持する訳にもいかず、人的戦闘力の縦深性を確保するのは至難である。

1 人事所要対応策

幹部の急速育成方策には、一般的には、①既存制度の採用枠の拡大 ②新制度の創設による採用 ③教育期間の短縮 ④予備役等の現役復帰等が考えられるが、それらが相次いで行われた。この様な場合、人的質の低下が否めないものであるが、使命感に燃えた学生と教官の熱意によって相当程度カバー出来たであろうと推察する。

2 既存制度の改編等

(1) 陸軍士官学校本科・予科の士官学校・予科士官学校への改編、航空士官学校独立

1937年に、陸軍士官学校本科は陸軍士官学校と改称され、陸軍士官学校予科は陸軍予科士官学校となる。更に、同年10月1日、航空兵科将校となすべき生徒及び学生の教育を行うために、陸軍士官学校分校が設置された。翌1938年12月に同分校は陸軍航空士官学校として独立した。1938年に陸士本科の修業期間が1年8ヶ月に短縮され、更に1941年に1年間に短縮される。

陸士卒業生数 士50期(S12/12)426名→士60期 1824名

(2) 廃止幼年学校の復活

1936年から1940年にかけて広島、仙台、熊本、大阪、名古屋の幼年学校が順次に

3 新制度の創設

(1) 特別幹部候補生（特幹）制度 1943(S18)年12月14日勅令

従来の少年兵（航空、通信などの特別の技能を必要とする兵種で、若年から軍学校生徒として教育）より短い教育機関で現役下士官を育成する制度として創設された。

兵種も拡大され、電波兵器関係要員も含まれた。期別や総数把握が困難で、終戦まで7万名上の採用があったとの著述もある。

(2) 幹部候補生制度（甲乙種別）甲種集合教育 1937(S12)年12月

従来の制度による甲種幹部候補生を見習士官として招集して、学校で集合教育を行った。この期が第一期甲種幹部候補生である。

また、幹部候補生制度が改正され、修業年限が二年修業制、補充源も拡大された。

幹部候補生採用数：1937年6160名、1938年9511名、1939年17666名

1940年以降 衛生部・技術部・法務部 幹部候補生制度

(3) 特別幹部候補生（特甲幹）

1944(S19)年5月、陸軍兵科及経理部予備役将校補充及服役臨時特例が施行され、これに基づき高等教育機関に在学する陸軍外部の志願者の中から選抜され、兵の階級を経ずに兵科又は経理部の予備役将校となる教育を受ける者が特別甲種幹部候補生である。戦局は切迫しており、従来以上に急速に予備役将校を補充するために、速成教育に対応する能力があり、なおかつ将校の地位に相応しいという条件を満たすよう採用資格が設けられた。

(4) その他 軍医候補生（1942年）、技術候補生（1939年）、予備校補生（1944年）

（第百九話 了）

第一百話 野戦部隊指揮官、斯くありたし 宮崎繁三郎中将

私事ながら、旧軍で言えば歩兵であった小生等の理想的な軍人像として、宮崎繁三郎中将はその筆頭に挙げられる。その宮崎中将の戦場における姿を点描し、指揮官のありようへの修養の参考に供したい。

I 宮崎繁三郎中将 略歴

1892 (M25) 1月生まれ 1965 (S40) 8月 没 73歳 岐阜県生まれ 陸士26期 陸大卒 満州事変、ノモンハン事件 (第五十一話参照) 及びインパール作戦 (第三十三話参照) に参加、後に第五十四師団長 陸軍中将 士官学校の成績 230/737番 陸代の成績 29/64番 (中の上クラス)

2 満州事変

1933年熱河作戦 (熱河省、河北省に対する軍事行動) に歩兵大隊長として軍功を挙げ、金鵄勲章を受章した。内地帰還後は、政治には全く関与しなかった。

3 ノモンハン事件：歩兵第16連隊長 (新発田) として参戦

ソ連軍の圧倒的な戦力に友軍部隊が壊滅する中、16連隊は最後まで奮闘、唯一生き残る。夜襲により奪還した“977高地”に対するソ連軍の猛攻に耐え、二日後に、宮崎は石工出身の兵士に命じ、十数個の石に部隊名と日付を刻み付けて、占領地の地中に埋め込んだ。これがその後の国境画定交渉に有利に働いた。『ノモンハン唯一の勝利部隊』

4 インパール作戦：31師団の歩兵団長 (少将) として参戦 (兵力約3000人)

①自らも荷を背負い、部隊の先頭にたって、要衝コヒマを急襲・攻略

②現地死守を命ぜられ敵中孤立、巧みな遅滞戦術で友軍退却の時間的余裕17日間獲得

③撤退命令受領：殿軍の任務完遂、負傷者の収容、戦死者の埋葬、負傷兵の担架を担ぎ、食糧を分け与えた。

④他部隊に対しても同様の扱い

『戦場における指揮官の卓越した統率』

5 ビルマ戦線：第54師団長として参戦

インパール作戦後の1945年4月、宮崎中将はビルマ戦線の第54師団長として、第三次アラカン作戦 (完作戦) に臨んだ。英軍師団を壊滅させる等の戦功もあるが、特筆すべきは、上級司令部であるビルマ方面軍司令官の突然の逃亡により敵中に完全孤立した際の宮崎の戦いぶりだ。

已むなく、師団分散して敵中突破を企図、多くの兵を失うも、最後まで果敢に戦い、脱出に成功した。敗戦後、英軍捕虜となるが、部下に対する不当な扱いには断固として抗議したという。

6 戦後 都下北沢に瀬戸物屋を営む。

決して功を誇らず、死ぬ間際も、朦朧とした意識の中で、敵中突破部隊を案じ、多くの部下を死なせてしまった忸怩たる思いと責任感を抱いていたと云われる。

*私見

- ・部下想い、「日本軍の良心」とも呼ばれた名将
- ・学校の成績、必ずしも指揮官適否に関係せず。
- ・戦場での野戦部隊指揮官としての功罪こそ軍人の最も重要な評価たるべき
- ・陸軍中枢部の幕僚としての育成も野戦部隊指揮官育成も共に重要で、何れかの偏重は宜しからず、人事評価も同様
- ・人間的な魅力なき者は卓越した野戦部隊指揮官にはなり得ず。
- ・勇将、名将は、物静かな紳士
- ・如何な状況でも責任を放棄せず完遂する烈々たる闘魂

第百十一話 満蒙開拓団、悲惨な逃避行！

終戦というか敗戦に伴う悲劇の一つが、日ソ中立条約を破って侵攻してきたソ連軍から逃げ惑う満蒙開拓団の苦難である。居留民を保護すべき関東軍の判断ミスもあり、その逃避行は筆舌に尽くし難いものであった。その一端を紹介する。今なお、残された課題もある。

1 終戦時の満蒙開拓団等の状況

開拓団 926団、24万2300人、義勇隊訓練所 102隊22,800人

報国農場 74場 4900人 合計26万9千人

その内4万7千人が動員されていたので、開拓団員数は22万3千人

その大半が、老人、女性、子供

死亡者 約8万人（在満州邦人死者総数20万人の4割を占める。）

2 関東軍等の居留邦人対策

日ソ開戦の危険が迫り、関東軍は在満居留民を内地へ移動させる案を検討するも、実現可能性なく断念、朝鮮半島も戦場となる恐れあり不適と判断し、国境沿いの放棄地区から関東軍抵抗陣地の後方に移動させる案を総司令部一課に提案したが、防諜上の理由で却下された。一方、満州開拓総局は開拓団に対する非常措置を連絡するも開拓団も居留民も事態を深刻に捉えていなかった。東京の中央省庁からは在満居留民の措置について何も明示されなかった。ソ連侵攻に際して、引き揚げ命令が発出されても、待避を潔しとはしなかった。それ程、無敵関東軍に対する信頼は絶大？

大本營の命令を受領した侵攻翌日の10日、居留民待避を検討開始し、民・官・軍の順で退避させることを決定したが、所詮無理であり、集まった者から順次列車移動させることとした。

①ソ連侵攻の予見可能性と事前準備の可能性

②奇襲侵攻であり、現場も大混乱し、情報周知もままならず、軍の意図的な行為と断ずるのは酷

③第一線部隊は居留民保護に努めるも、ソ連軍との戦闘中でもあり、救出も殆ど不可能

3 悲惨な逃避行等

逃避行の状況は、「検証・満州一九四五年夏 満蒙開拓団の終焉」に詳しいが、幾つかの事例を列記するに止める。

①ソ連軍、満州民、匪賊による暴行・略奪・虐殺（葛根廟事件等）

②集団自決 霞城集落、小古洞開拓団、来民開拓団、高田開拓団等々

③飢餓・疾患・疲労で逃避行中に生き別れ、脱落

④戦闘に巻き込まれた ハタホ開拓団

⑤上掲書の小項目を参考までに列記する。

「死体の山、足が動いた」「病魔に食い尽くされた三俣流開拓団」「散りぢりになって壊滅した南雲山開拓団」「死の淵から這い上がった姉妹」「目を覆う死者の群れ」「墓は松花江の流れ」「引き揚げ船内で死ぬ」「暴民の標的とされた開拓団」

⑥黒川開拓団：奇跡的全員帰国の裏には、人身御供として女性をソ連兵に差し出し保護された悲しき物語。

⑦襁褓を纏い、女性は丸刈りに

⑧残留孤児問題や残留婦人問題の発生 今なお解決とは言えず

* 終戦時の各種状況を知れば知るほど、許し難い国は某国であると思わざるを得ない。

それにしても、予見可能性の問題はあるが、ソ連軍の侵攻を予測して事前に対策を講ずべきであった中央・現地の行政及び軍の対応は残念だ。二度と同じ悲劇は！

（第百十一話 了）

第百十二話 新戦法創造力と対応力

日本は創意工夫は得意だが、オリジナリティのある戦術の創造は不得手なのだろうか？また、ビルマ戦線でのウィングート旅団のゲリラ戦術に翻弄もされて（？）いるが、戦いは正々堂々とすべきものとの拘りみたいなものがあって、作戦にも歯切れがないように感じるのだが・・・

1 グライダーを使用した作戦

(1) エバン・エマール要塞攻撃(1940/5、独軍)

1940年5月10日、ドイツ空軍がベルギーへの空爆を開始した。ベルギー空軍は一瞬にして壊滅し、ベルギー最大のエバン・エマール要塞は、コッホ突撃大隊の一部隊（10機？）が要塞上に着陸し、速やかに要塞を制圧し、24時間で陥落した。グライダー使用は無音性に着目したヒットラーの命

(2) ノルマンディー上陸作戦のトンガ作戦(1944/6、連合軍)

ノルマンディー強襲上陸前夜、英・加軍及び米軍部隊を独軍後方に空挺降下させた。その内、英加軍の作戦コード名がトンガ作戦であり、この作戦にグライダーが使用された。ハワード少佐率いる2個中隊はハリファックス爆撃機に曳航されたグライダー6組に分乗・出発した。グライダーはメルヴィルの東、ノルマンディー海岸上空、高度1,900mで切り離された。奇襲に成功し、ペガサス橋及びホルサ橋の制圧メルヴィル陣地を制圧し破壊し、上陸作戦に寄与した。

2 ビルマ方面軍が悩まされたウィングート少将指揮するチンディット作戦

全ビルマを占領され、英軍は日本軍の後方に部隊を長距離挺進させ、補給を空中から行うことができれば、日本軍の後方攪乱が可能と考え、長距離浸透特殊作戦を立案した。それに使用するための部隊として、77印度歩兵旅団を基幹とするチンディット部隊を編成し、二次にわたる作戦を敢行した。

(1) 第一次チンディット作戦 1943(S18)年

1943年2月8日、部隊3200名は7個縦隊に分かれインパール方面からビルマ北部へ進入した。各縦隊はアラカン山脈を越え、二つの大河を渡河し、日本軍陣内奥深く侵攻した。日本軍は第十八師団を中心に各地から部隊をかき集めて掃討を試みたが、チンディット部隊は優勢な敵と遭遇すれば分散して後退の戦法を採った。小部隊の悲しさ、空中補給も厳しくなり、3月24日、各縦隊は後退が命ぜられた。帰還将兵は2182名だが、航空補給があれば敵陣内やジャングルでも長期間作戦行動可能であることを実証した。

(2) 第二次チンディット作戦（サーズデイ作戦）

1944(S19)年2月、2回目のビルマ侵入作戦が開始された。3月5日、74機のグライダーを使用した空挺作戦により、3個旅団9,000名がマンダレー・ミートキーナ間に降下し、日本軍の後方攪乱、補給路を遮断した。日本軍は部隊をかき集めて掃討に努めたものの、チンディット部隊を完全に捕捉することはできなかった。

3 帝国陸軍

陸軍がグライダーの軍事利用の研究を開始したのは、1942(S17)年頃、1944年「滑空飛行第一戦隊」が編成されたが、比島、沖縄作戦での使用が計画はされたが、遂に実戦使用されることなく終戦を迎えた。

* 新戦法の評価は分かれるところではあるが、斯様な作戦を敢行し得る軍の柔軟性には敬意を表す。ゲリラ戦術に悩まされる日本軍を見ていると、兵は詭道であると頭では理解していても、容易に受け入れられない日本人気質があるのではないかと思いたくなる。想定外の作戦に対する柔軟性を持ち得たいものだ。

第百十三話 建前と本音の戦場の性

虚構は崩れたにも拘らず（第七十五話参照）、所謂従軍慰安婦問題を執拗に問題化する国やメディアが存在する。本件に係る百科全書的力作と評される「慰安婦と戦場の性」（秦郁彦著 新潮選書）から何点かを紹介したい。

1 諸外国に見る「戦場の性」（上掲書第5章から摘記）

「売春は世界最古の職業」と同時に軍隊用の慰安婦も同様、古くて新しい問題。

WW1迄：遠征部隊には娘子軍、陣地戦では売春宿が一般的なパターン

ナポレオン軍 「風紀の頹廃と性病は敵軍の砲火の十倍もの犠牲」

この後近代「公娼制度」創設され、欧州大陸諸国へ

第二次大戦期以降 三類型（著者）

① 自由恋愛型

米英は公娼制から私娼制中心、世論特に故国の女性の監視厳しく、軍内からも抵抗→慰安所の設置や公娼の公然たる利用困難→現地人女性を含む私娼の利用黙認

デメリットは性病患者の増大、将軍級の専属運転手等は現地妻的役割のケースも

*日本進駐軍対処：内務省設置のRAA（特殊慰安施設協会）「性の防波堤」を期待

応募者殺到 ピーク時7万とも 1946年1月公娼廃止指令と同時に閉鎖

爾後はいわば自由恋愛型

②慰安所型

日独が代表例 慰安所総数（1942年時点 日本約400ヶ所、独500ヶ所）

日独共に本国では公娼制があり、戦地では監督役を警察から軍に肩代わりするだけであつた。管理運営の仕組みまで両国は似ていた。

③レイプ型（悍ましいが、斯かる国あり）

国や軍の幹部が半公然とレイプによる「復讐」を奨励したのはソ連（ロシア）

公娼制なく慰安所なきは、反って「福利厚生」と理解されていた？

1992年の旧ユーゴの内戦 民族浄化名目の組織的レイプ

バングラ独立戦、カンボジア・ベトナム戦でも似たような話

参考：①ベトナム戦争

仏軍：移動慰安所 米軍：サイゴン中心に売春産業繁栄

韓国：映画「ホワイト・バッジ」（1993）、混血児5000とも3万人とも

②朝鮮戦争 米兵相手の売春婦 4万人とも、ヤンコンジュ（洋公主）

2 日本

(1) 支那戦場と満州

日本軍専用の慰安所 第一次上海事変時の上海

支那事変拡大に伴い各種の慰安施設も拡大

色々なタイプがあつた。①過渡的・一時的な軍直営 ②軍が監督統制し軍人・軍属（特定の部隊専属、都市などで軍が認可）③軍が民間の売春宿などを兵員用に指定する軍利用の慰安所で民間人も利用 ④純然たる民間の売春宿で軍人も利用 ⑤料理屋、カフェー、バーなど売春を兼業した施設

彼女等の待遇等は決して悪い訳ではないが、紙幅上割愛する。

(2) 太平洋島戦域 (1)のシステムを継承するも、戦場特性に応じた変容

需要増大により内地・朝鮮・台湾更には現地女性

* 建前の道徳厳格主義で戦場における性の問題が解決出来る訳ではなく、レイプ型を除き何処の国も現実的な問題として苦勞。長期駐留する軍隊も同様の問題を内蔵。

（第百十三話 了）

第百十四話 窮余の一策、木炭自動車！

日本は今も昔も資源小国であり、化石燃料の殆どを外国に依存している。大東亜戦争前から戦争間を通じて、エネルギー安全保障をどのように推進してきたのかを概観する。抑々、日米(英蘭)戦は端的に言えば、日本の南部仏印進駐(1941/7/28)に対する制裁として発動された石油の対日全面禁輸(1941/8/1)に対抗する戦争である。

斯かる事態を予期し、そして現実に直面して我が国は如何なる準備を為したのかを見てみよう。

1 満州事変(1931/9/18)後の戦時統制経済体制の逐次の強化

- ・1933(S8)年、商工省「石油国策実施要綱」を策定 要点①石油の民間保有義務 ②石油業の振興(事業の許可制等) ③石油資源の確保開発 ④代用燃料工業の振興
- ・1934(S9)年 石油業法制定施行 爾後国内石油業の再編カルテル化、爾後原油の輸入・消費規制が強化されていった。

2 盧溝橋事件(1937(S12)年7月7日)を機に更に戦時統制経済化進展

- ・同年9月 企画院創設(物資動員計画策定)
- ・同年11月 商工省外局の燃料局に指示 石油消費節約の実行方針
*木炭、薪などガソリン代用燃料使用装置の普及を図り、(中略)、速やかに薪炭ガス発生炉を使用する。」とされた。

3 日米英蘭戦(1941/12/8)

日本は必要とする石油の9割以上を米国加州(米:7~8割依存)及び蘭印から輸入していた。米英により石油禁輸が為されると正に日本は死命を制せられることになる。日本の南部仏印進駐(1941(S16)年7月25日)に待っていましたとばかりに米国による対日石油禁輸が発動され、遂に同年12月8日に戦端が開かれた。

4 代替燃料とその使用状況

- (1) 石油輸入国であった日独は、情勢緊迫に応じて、戦前から各種施策を講じていた。独は、合成石油(ガソリン、軽油類似品)によりある程度の軍用燃料自給可能であった。

が、日本は独の技術を導入するも、良質のクロム鋼が入手できず、工作精度も不十分で合成石油の生産は不満足な状況であった。

(2) 木炭自動車等

1920年代末期頃から国産自動車用木炭ガス発生炉開発が始まっていた。浅川式、三木式、シラト式等々様々なガス発生炉が開発された。大別:湿式、乾式

木炭ガス発生炉は種々問題もあったが、窮余の一策で止むを得ず、導入が進められた。特に支那事変以降急速に導入が進んだ。全国キャラバンもされ、普及促進用の歌やレコードもあった。尚、現存する木炭自動車もある。

1940年度 全国のバスの半分程度が木炭車、1942年度は代燃車(木炭自動車)のみとなっている。

その他として、地元産の天然ガス利用、良質無煙炭使用の例もある。

- (3) ・各種燃料油の製造法:石炭を原料とする高圧水素添加法,低湿乾溜法およびフィッシャー式石油合成法並びに油母頁岩の乾溜法が大規模に実施された。

・航空用配合燃料の製造:醗酵法またはアセチレンよりの合成法によって得られたブタノールを原料としてイソオクタンを合成する方法に力が注がれた。

・潤滑油の製法:動植物油脂,生ゴム,パラフィン等を原料とする方法に多数の研究が行われその一部は工業化された。

・松根油も航空用ガソリンにと試みられたが、・・・



第百十五話 お粗末なシーレーン防衛！

日本の対米英蘭戦争の基本的戦略は、第一段作戦（南方要域奪取し長期持久態勢確立）により、蘭印等の油田を含む資源地帯を殆ど無傷で確保して、現地精製等が望めないの、確保した石油・資源は日本に輸送して、軍需・官需及び民需に供することであった。この為には、輸送力の確保とその輸送間の防護が必須の条件であった筈だが、極めてお粗末な態勢であった。

承知の通り、第一段の軍事作戦は極めて順調に進展したが、その後の南方資源の日本への環送はままならなかった。何が問題だったのだろうか？「ガソリンの一滴は血の一滴」とも云われた石油を例に見てみたい。

1 採らぬ狸の皮算用、画餅に帰した石油輸入

昭和16年11月に戦争の可否を議論する御前会議に提出された企画院の資料「帝国国策遂行要領」審議資料では南方作戦を遂行した場合、それまで貯めた石油備蓄は減っていくが、それを相殺して南方からの石油輸送が増大するため、米国からの石油供給がなくても戦争遂行は可能である。」となっていた。シミュレーション上では、南方からの石油輸送量は昭和17年→昭和19年に30万トンから450万トンに拡大することとなっていた。現実には、南方からの石油輸入は昭和18年にピークを迎えるが、その後、タンカーが次々に沈められ、昭和19年には前年比80%減、昭和20年にはほぼ途絶えてしまう。

2 シーレーン防衛に関する海軍等の考え方

海上交通路の防衛或いは破壊は海軍の主任務である筈だが、当時の日本海軍にはそれを果せる程の戦力も無ければ、そのような用兵思想もなかった。と云えば、言い過ぎなのだろうが、“第一線兵力による制海・制空によって確保を期す、直接護衛兵力としては防備兵力の一部等をもって云々”と云うものであった。シーレーンの南方要域までの拡大によって、近海等を除き連合艦隊が担当することとなった。

日本海軍は、日米開戦後の1942(S17)4月に、第一海上護衛隊（東南アジア～内地間）、第二海上護衛隊（南洋諸島～内地間）を発足させ、その後も、軍令部内に海上護衛保護計画をも所掌する課が設けられ、1943(S18)年11月には海上護衛総司令部が設置され、第三、第四護衛隊も創設されたが、その実態たるや、質・量共にお粗末だった。

3 米軍の通商破壊作戦

米軍は、特に戦争後半において、日本に対し通商破壊作戦を行った。その主力は、豪州やハワイを基地とした潜水艦である。潜水艦3隻を一組とし、ウルフパックと名付け太平洋をはじめ、南シナ海、東シナ海、さらには日本海で作戦を行った。また、1944年には空母機動部隊の艦載機も南シナ海で作戦行動を行い、多数の商船を撃沈した。



末期には「飢餓作戦」と命名された大規模な機雷投下作戦を、日本本土周辺で行った。ボーイングB-29爆撃機が、日本や朝鮮半島の港湾に機雷を投下し、艦船の運航を妨げた。ピーク時には潜水艦などの戦果を上回り、日本商船の月間喪失原因の過半数を占めた。

4 問題点は？

陸軍は早くから海上交通護衛を要望していたが、聞き入れられなかった。海軍は短期決戦により勝利すれば海上護衛の為に戦力を割く必要なしとの基本的な用兵思想があった。また、米潜水艦の能力を見誤ったのかも知れぬ。日本の戦争指導構想と実際の軍の作戦運用が余りにも乖離していたとも云える。独善的過ぎた連合艦隊！

* 作戦開始時点で、日本の基本構想が破綻していたのだ、何ということだ。

(第百十五話 了)

第百十六話 不沈空母は画餅に帰した！

昭和18年、日本は守勢に追い込まれ、改めて長期持久態勢を構築した。海軍は委任統治領であった南洋群島の不沈空母化を狙って、邀撃帯構想を発令したのだが、その実態はどうだったのだろうか？

1 海軍第三段作戦

海軍の第二段作戦は、目標を達成することはできず、ガダルカナルを中心とするソロモンでの死闘の中で、日本軍は決定的な守勢に立たされた。ガ島撤退後の昭和18年2月に陸軍が、3月には海軍が新たな作戦計画を策定した。海軍の第三段作戦は、1943(S18)年3月25日付で「海軍作戦方針」として発令された。長期持久態勢への転換であるが、随時積極的機會を作為して反攻米軍戦力を減殺することを企図していた。

2 Z作戦要領及び邀撃帯設定要領

軍令部の方針に基づき、連合艦隊は、「Z作戦要領」及び「邀撃帯設定要領等」を発令した。その方針は、「主作戦を南東方面に指向し、航空作戦を主体として陸軍と協同して敵の進攻を撃砕し、その間に我が戦力の充実を待って攻勢に転じて、邀撃帯を逐次推進して要域を確保する。」と云うものであった。邀撃帯は、前進根拠地を中核とし、三線の縦深を有する航空基地群をもって構成する。第三邀撃帯とされた内南洋の場合、トラックが前進根拠地、第一線基地群（マーシャル、ギルバート等）、第二線基地群（ブラウン等）、第三基地群（カロリン、マリアナ）が設定された。

3 本邀撃帯構想の評価と課題は

来攻する米軍と一旦間合いを切って、態勢を立て直すことは結構だし、そうあるべきだろう。また、本構想も机上のプランとしては特段の問題はない。が、実現には幾つかの前提条件が必要だ。①必要かつ十分な航空攻撃戦力を保有していること。②前進根拠地及び各島嶼の航空基地が不沈空母並みの抗堪力を有していること。③各島嶼の航空基地群相互の支援が可能であること④十分な補給支援等の後方支援能力を有すること（船舶能力）等が必須の条件だ。持久と邀撃の関係は微妙だと思うが・・・

4 邀撃帯構想の現実

① 各航空基地群の不沈空母化は画餅

抑々、航空基地を設定する各島嶼は、委任統治領であり、ワシントン条約の防備制限条約の対象地域であり、条約失効後によりやく手を付けたばかりだった。

且つ近代的施設工事能力なく人力に頼らざるを得ず、地勢的にも飛行場不適であった。

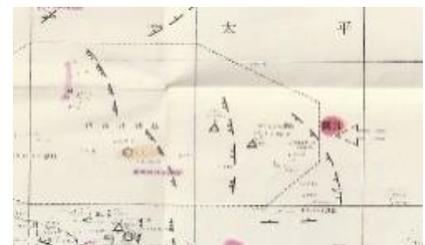
② 日本海軍はこの時まで、相当数の航空機や搭乗員を失っており、且つ日本の航空機製造能力は米国とは相当乖離（28180機対96318機）して居り、その差はますます増大するばかりであった。一方陸軍はソ連に備えるとして支那に相当数の航空機を拘置し、積極的に協力する気運はなかった。最も、陸軍機に海洋での海軍との協同作戦がスムーズに行なえたとも思えぬ。

③ 設定された各島嶼の航空基地間の相互支援は戦闘機の飛行距離の関係で在空時間が短い場合も多く、必ずしも十分ではなかった。防勢作戦での相互支援は作戦成功の要だが、厳しいものがあつた。

④ 事前集積物資も必ずしも十分でなく、かつ継続的な兵站支援も行い難いとなれば、各島嶼は自滅するしかなくなる。

⑤ 防勢作戦では、来攻する敵の時期・場所・勢力に係る情報収集が重要であるが、相応の手段を有していなかったのは致命的だ。

*準備未完に乗じられ、逐次各個撃破を受けたのは言うまでもない。



第百十七話 捕虜虐待、反日プロパガンダには毅然と反論を

(関連：第七十一話「日本国内の捕虜収容所実態等」第二十六話「捕虜に係る虐待事例や認識の差」)

上掲の2話で日本軍の捕虜取り扱い等について述べたが、日本軍が一方的に虐待を繰り返したかのような誤解を与える恐れもあり、日本軍の捕虜取り扱いの実態についての適当な書籍を探していたところ、気鋭のジャーナリスト丸谷元人氏の「日本軍は本当に「残虐」だったのか」(ハート出版)に出会った。300頁弱の本を1枚に要約するのは至難の業であるが、挑戦してみたい。意のある所を汲んで頂ければ幸甚である。



1 「不屈の男アンブロークン」(2010/11/16刊、4年間ベストセラー)の荒唐無稽さ

本の中で描写される余りにも杜撰且つ不正確な事例(奴隷であり、生きたまま食われた、数千人の捕虜が殴られたり焼かれたり、突き刺され、棍棒による投打で殺され、銃殺され、斬首され、人体実験で殺害され、また人肉食の習慣によってetc)その他にも、漂流中の著者に対する日本海軍の爆撃・銃撃の話、捕虜になってからの話等々常識的にも不可解、但し彼を担当した日本軍看守の蛮行は想像を絶するが、彼個人の行為であり、一事をもって万端を押し量った類である。

2 日本の捕虜収容所の実態等

①捕虜収容所で起きた文明の衝突

殴って体で覚えさせることを伝統として日本軍の取扱に耐えられなかった連合軍捕虜

②日本国内の捕虜収容所における「食事」：厳しい食糧事情の中最大限の配慮

③高い死亡率 国内環送中東の病死や戦没まで含めた数字が独り歩き

④捕虜と日本軍将兵との人間的交流を記した連合軍捕虜の手記、日記多数存在

⑤日本軍管理下における捕虜の状態は、捕虜となった際の兵士たちの健康状態(病気、負傷の有無)や、病院どころかまともな道路インフラさえなかった未開で過酷な戦場における環境、そして個々の捕虜の受けた感想は、「被害者意識」の他にも「人種的優越感の裏返しとしての激しい憎悪」等に影響されていた。その一方で、日本側はあくまでも規則に従って、捕虜の管理を行っており、その規則を盾に殴る蹴るの暴行を働いた人間もいたが、その一方で少なくない人たちが、許される最大限の範囲で捕虜を人道的に扱おうとしていた。(同書 178p)

⑥B C級戦犯に対する裁判では、一方的且つ不公平、不十分とも云うべき審理の結果、実に多くの悲劇が生まれることとなったが、・・・(同書 182p)

3 日本人戦犯に対するすさまじい虐待

『戦犯裁判の実相』(単嶋法務委員会・編 槇書房 昭和27年刊の復刻)には、ゲームのみならず、アジア各地で行われた連合軍の裁判の様子と日本人容疑者に対する凄まじい蛮行の限りが詳細に書かれているが、それらの状況は涙なしには読むことができない。(同書 186p~187p)

4 その他

①連合軍による残虐行為について：語られないか、日本が先にやった、残虐だった日本人は何も言う資格がないといった責任転嫁論、また論理を飛躍させ高邁な次元論に

②片腹痛き、自らの残虐行為に頬被りし、70年間の日本軍の行為を掘り出して被害者面

5 正しき反論を

・都合の良いすり替え論法、自己正当化論、日本軍は残虐とする一方的断罪等には正しき反論

・黙っていると認めたことになる・はっきり主張する一方、自らを知り、相手を知り、常に他者への敬意をもって、日本人らしい立ち居振る舞いをも忘れてはならない。

(第百十七話 了)

第百十八話 厳しい状況下でこそ協同の実を！

大東亜戦争の初期、第一段進攻作戦における陸海の協同はおおむね順調に行われたと評価できる。然しながら、第二段作戦以降においては、種々の要因があり、協同の実が上がったとは言いがたい。近代戦における陸・海・（空）の協同の重要性は言うまでもないが、何故日本軍はそれが出来なかったのかを観察、反省することも重要だ。

1 作戦目的・目標の分裂

協同の実効性を得るためには、作戦目的・目標の共有、認識の統一が絶対条件である。目的・目標の統一があって、具体的な戦況推移に基づく役割分担が明確になり、それに基づく協定が締結されるのである。

本メモランダムにおいて、何回か述べた如く、第二段作戦以降については作戦目的が混乱、分裂し、為に不徹底な作戦協定となってしまった。

2 柔軟性ある作戦協定の締結と適時の修正

主導権を保持し得る攻勢作戦と違い、受動的な防勢作戦においては、敵の出方に応ずる柔軟な作戦が必須であり、それに応ずる作戦協定が重要だ。また、戦場の錯誤や失敗に応じて機敏に修正することも肝要だ。陸海軍は中央協定そして現地協定という二段階方式の作戦協定であり、柔軟性、機敏性に欠けていた。

3 初期進攻作戦における陸海協同成功の要因

体質も作戦思想も異なる者の協同が第一段作戦で成功したのは、長年における年度作戦計画策定の段階における密接な調整実績がノウハウとして蓄積されていたことが大きい。協同には準備の周到と密接な調整が必須である。

4 指揮の統一の必要性和その困難性

協同の限界もあり、太平洋島嶼部における戦局上の必要性等から、指揮の統一が提唱されたが、陸海軍統帥部レベルでは相互不信が根強く、統一は為されなかった。

現地部隊レベルでは、逐次に進められたが、必ずしも奏功したとは言えない。

① 概して、海上作戦の場合は、海軍指揮官の下に指揮が統一されたが、陸上作戦における指揮の統一は不徹底だった場合がままあり、航空作戦に関しても指揮の統一はやや不徹底な場合が多かったと云われる。

② マリアナ作戦においては、現地陸海空の各作戦部隊の指揮が、中部太平洋方面艦隊司令官南雲忠一中将に統一されたが、海空決戦兵力たる第一航空艦隊と機動艦隊は、別格の連合艦隊司令官の直轄であり、同長官が運用できる兵力ではなかった。

絶対国防圏構想及び（旧）陸海軍中央協定に示された中部太平洋方面確保要域の表現は、抽象的で漠然としていたばかりではなく、要線確保の具体的な構想も同床異夢を描いていたとも云われる。2月15日に、旧協定の見直しが行われ、新中央協定が締結された。この後、連合艦隊は「あ」号作戦を策定したが、本「あ」号作戦計画は統合計画としての配慮を欠いたばかりではなく、マリアナ方面における陸海空戦力の統合発揮が実質的に困難な計画となった。作戦のための編成において、航空作戦の指揮統一において、防空作戦の指揮において、陣地の編成及び築城の思想統一において問題があったと指摘されている。

③ 比島、沖縄の作戦では、海・空作戦部隊の指揮組織が複雑で且つ陸上部隊の指揮系統と一致せず、この作戦を主宰し得る唯一の全責任者は不在だったとされる。

複雑な指揮系統下では、機微な防勢作戦は無理である。

* 協同において最も重要なことは相互信頼であり、相互理解である。準備の周到も重要だ。協同の伝統・文化のない日本軍で、急遽協同作戦を実施しても、進攻作戦ならいざ知らず、防勢作戦においては無理だ。日本も鼎の軽重が問われる哉？



第百十九話 建艦競争、消耗戦そして海軍消滅

米国との衝突の可能性が高まり、ワシントン及びロンドンの海軍軍縮条約が失効すると日米を含む列強は、夫々の思惑の下海軍力の建設に邁進した。シーソーゲームは開戦まで続いた。開戦後は建艦と損耗を繰り返しつつ、最終的には国家の国力によってその帰趨が決まる。日本海軍は果たしてどうだったのか、日本はそのような消耗戦に耐えられる国だったのだろうか？

1 日米開戦前の建艦競争

1936年末、日本の脱退宣言によりワシントン条約は失効し、ロンドン会議からも脱退し、以後世界は無条約状態となった。

- ・日本 1937年 第三次海軍補充計画(③計画) (目玉は超弩級戦艦「大和」「武蔵」)
- ・米国 1938年 第二次ヴィンソン案 (海軍力25%増強案) 既存
計画との合計では日本の4倍に！
- ・日本 1939年 第四次海軍軍備充実計画(④計画)
計80隻の建造開始
- ・米国 1940年 第三次ヴィンソン案 更に海軍力25%増強(議会で11%増強に抑制)
- ・日本 第5次海軍軍備充実計画(⑤計画)(第三次と第四次計画分合計に等しい建艦計画)
- ・米国 1940年7月 両洋艦隊法(スターク法) 海軍力70%増強 米国は決意した？
(太平洋・大西洋正面で日独に対抗し得る海軍力建設)
- ・日本 第六次海軍軍備充実計画を検討するも、実現不可能と思われた。戦力比が優位のうちに開戦した方が得策との判断も働いた。特に「翔鶴」「瑞鶴」制式空母戦力化時期は開戦時期決定に影響



2 日米海軍力推移(空母、戦艦、巡洋艦、駆逐艦、潜水艦)

1項のような建艦競争を繰り返した日米だが、開戦後の海軍力推移はどうなったであろうか？

- ・開戦時 日：100.1万トン(237隻) 米：143万トン(345隻)
- ・ハワイ作戦直後 日：100万トン236隻 米：131万トン341隻
- ・MI作戦前 日：110万トン(236隻)、米：147万トン、368隻
- ・MI作戦後 日：100万4000トン230隻、米：144万9000トン366隻
- ・ガ島作戦前 日：103万トン232隻 米：159万5000トン393隻
- ・ガ島撤退時 日：100万7000トン212隻 米：181万トン457隻
- ・米軍反攻前 日：99万6000トン208隻 米：285万トン661隻
- ・マリアナ沖海戦前日：98万2000トン186隻 米：318万8000トン734隻
- ・マリアナ沖海戦後日：90万2000トン182隻 米：N/C
- ・捷号作戦直前 日：87万9000トン165隻 米：352万2000トン 791隻
- ・レイテ沖海戦

投入戦力比較 空母 日×1 米×制式空母8、軽空母×3、米×8、+護衛空母も
母艦搭載機数 日×116機 米×1280機
戦艦 日×9 米×12 駆逐艦 日×33、米×71

損害数は涙ありて書けず 実質的に海軍力消滅

- * ランチェスターの二次法則を持ち出すまでもなく、戦力差が大になるほど小戦力側の被害が急激に増大する。その典型を見るようだ。米国の底力を思い知るばかりである。それにしても両洋艦隊法の時点で米国の決意は固まり、後は時間のみだった。

(第百十九話 了)

第二十話 精強無比の名も悲し、関東軍！

関東軍と云うとどうも悪いイメージ、陸軍暴走のシンボリック的存在と考えられている。一方では精鋭無比とも思われていた。そのような関東軍は、大東亜戦争において如何なる役割を果たしたのであるだろうか？北方の脅威に大軍をもって備えているのみで、全般戦局に如何なる寄与をもしていない、揚げ句は中立条約に違反して侵攻したソ連軍に為す術もなかった軍隊であると諷られてもいるようだ。

1 関東軍の概要

関東軍の前身は、日露戦争で得た租借地、関東州と南満州鉄道（満鉄）の付属地の守備をしていた関東都督府陸軍部が前身である。1919年、台湾軍・朝鮮軍・支那駐屯軍と同じ軍として独立した。1928年張作霖爆殺事件、1931年柳条湖事件（満州事変の発端）を起こし、1932年満州国が建国された。1938年張鼓峰事件、1939年ノモンハン事件が起きた。尚、これより前の1937（S12）年7月には盧溝橋事件が起き、日本は、大東亜戦争に突入していった。1941（S16）年7月、独ソ戦にあわせて関特演（関東軍特種演習）の戦時動員を行い、関東軍は14個師団、兵力74万人以上となった。

（注：師団とは諸兵科編成1万から2万人前後の兵員、長期にわたり独立的作戦可能な兵団を云い、この概念は列国ともほぼ同じである。）



2 関東軍から他方面への戦力転用状況

(1) 関特演時の関東軍の師団数

直轄：5個師団（10D、14D、28D、29D、51D）、第三軍：4個師団（8D、9D、12D、57D）、第五軍：3個師団（11D、24D、25D）、第四軍：1個師団（1D）、その他：1個師団（23D）の14個師団である。（注：Dは師団）

(2) 香港攻略作戦への参加 1941年9月 51Dを抽出・転用

(3) 絶対国防圏設定(1943/9/30)に伴う防備強化の為所要の部隊を抽出・転用

○南方、グアムへ 10D、14D、29D、8D、1D、23D の6個師団

○沖縄・台湾等へ 28D、9D、12D、12D、24D、71D の6個師団

（71Dは、S17 琿春駐屯隊等を基幹に編成された。）

○本土防衛用 57D、11D、25D の3個師団

○朝鮮へ 111D、120D （何れも在満州の独立守備隊を基幹として編成した。）

以上の師団を他方面に転用したため、関特演時の常設師団は全て関東軍隷下を離れてしまった。

3 関東軍に対する師団の増強

十分に訓練された隷下師団を他方面に転用した関東軍の穴埋め措置

(1) 支那派遣軍から関東軍隷下へ 5個師団(39D、59D、63D、79D、117D)

ソ満国境の緊張の高まりもあり、当初は支那派遣軍隷下の精鋭師団の抽出が検討されたが、実際に抽出されたのは、支那戦線で後方警備を担当していた師団であった。

(2) 南方転出留守部隊を基幹とし、現地招集兵を補充して編成 6個師団（107D、108D、112D、119D、122D、123D）

(3) 「根こそぎ動員」兵で編成された師団 7個師団（135D、136D、137D、138D、139D、148D、149D）（S20/7 在満日系邦人男子35万人から25万人を動員）

(4) ソ連侵攻に伴い、朝鮮軍を廃止し新編された17軍方面軍が関東軍隷下に

* ソ連侵攻時の関東軍は、見掛け上相当な戦力だったが、実態は張子の虎とも云える。まともにソ連軍に抗しきれなかったのも理解できるが、それでも敢闘した部隊は多い。北を気にしつつ、支那で戦い、南方でも戦った日本陸軍であった。既に破断界を越えていたのだろう。日米戦前に戦線整理が出来なかったのが悔やまされる。

（第二十話 了）

第百二十一話 サイレントネービーの苦悩と決意

海軍の3長官（頭職）は、連合艦隊司令長官、海軍大臣及び軍令部総長であり、この三職を全て経験した海軍軍人は、元帥海軍大将永野修身（兵28）のみである。この永野大将に関する評価は芳しいものではない。屈指の親米派でありながら、海軍統帥の頂点である海軍軍令部総長として、開戦に係る意志決定、開戦後の戦争指導において、厳しい評価を受けている。開戦前後の永野軍令部総長の言動を見てみるとサイレントネービーとしての面目が顕現しているようだ。御前会議後の挨拶文とされるものは、今なお我らの胸を打つので、それを最後に紹介したい。

1 軍令部次長を親独派から米国通の伊藤整一に交代させた。

2 北進論と南進論

独ソ戦（1941/6/22）切迫との報で、俄かに対ソ戦好機到来、北進すべしとする論（松岡外相等の主張）が急激に台頭した主張した際、永野は、南部仏印進駐を強く推した。

その後も対ソ戦には絶対反対を主張し、“対米戦においては、現在ならば勝利の可能性がある。然し、その機会は時間の経過と共に失われる。”と。

3 7月30日の天皇への上奏

海軍としては対米戦を望んでいない、日米交渉まとまらなければ、打って出るしかない。勝算はと問われ、勝てるかどうか解りません。と率直に述べた。

大将の真意は奈辺にあったのかは不明だが、・・・統帥と国務を統括する立場の天皇に実態を知って欲しかったのか？ 慎重意見を述べるのは難しい中での発言だった。

4 ABCD包囲網に対する天皇への奉答

海軍としては対米戦を決断するならば早期に開戦した方が有利と述べた。

5 山本連合艦隊司令長官具申の真珠湾攻撃に対する永野軍令部総長の判断

真珠湾攻撃は投機性が高く軍令部内でも反対意見が根強くあったし、永野総長自身も、南方資源地帯の確保と漸減邀撃作戦を構想しており、余りにも博打過ぎると慎重だった。山本大将の辞職を仄めかした恫喝もあって、永野が折れたと云える。

6 「帝国国策遂行要領」（9月6日決定）策定に至る過程での永野大将の主張

会議では、以下のような発言を繰り返している。

①中途半端な態度で臥薪嘗胆しても、何の解決にもならない。②臥薪嘗胆ならば、腹を据えて米国に譲歩 ③戦うなら、今以外に戦機はない。戦った場合、国力上2年以後は自信がない。④首・外相には、開戦に至らないようにする覚悟と勇気があるかとも。

9月6日の御前会議後に統帥部を代表する形で述べた挨拶文（8項）

7 11月1日大本営政府連絡会議、その後の発言等

6項と大同小異の内容

8 永野軍令部総長挨拶文「戦わざれば亡国と政府は判断されたが、戦うもまた亡国につながるやもしれぬ。しかし、戦わずして国亡びた場合は魂まで失った真の亡国である。しかして、最後の一兵まで戦うことによってのみ、死中に活路を見出うるであろう。戦ってよしんば勝たずとも、護国に徹した日本精神さえ残れば、我等の子孫は再三再起するであろう。そして、いったん戦争と決定せられた場合、我等軍人はただただ大命一下戦いに赴くのみである」と語った。



*海軍は政治に拘わらず、関わりを持つのはただ海軍大臣のみであるとのサイレントネービーの矩をきっちりと遵守していた姿が窺われる。海軍が一致して反対すればとの思いも無きにしも非ずだが、テロや内乱を恐れたとの指摘もある。職分を頑なに遵守しながらも、大将の思いは複雑で、苦悩も大きかったろう。扨、日本精神は残ったか？永野の悲痛な叫びを我等は何と聞く！

第百二十二話 我が将兵の敢闘、此処にあり（5）後に続くものを信ず「若林大尉」

1943(S18)年9月21日夜放送されたラジオ番組『若き血に祈る』で陸軍省兵務課長によって、その壮絶な最期が紹介された若林東一大尉を紹介して、極限状況下における第一線指揮官の姿を見てみたい。

1 若林中尉(戦死後大尉昇進)の経歴等

若林中尉は山梨県南部町出身で、昭和8年1月に甲府の第1師団歩兵第49連隊に入営、伍長、軍曹と昇進した後、S11年4月に陸軍予科士官学校に入校、13年4月に士官学校本科に進み、14年9月に52期で卒業、11月少尉任官という兵上がりの将校という異色の経歴の持ち主である。若林大尉は、支那大陸の作戦に参加した後、第38師団228連隊第10中隊長として、九龍半島香港攻略作戦及びガ島作戦に参加した。



2 九龍半島攻略作戦における偉功（1941(S16)年12/8～12/25）

九龍半島には「ジン・ドリンカーズ・ライン」と呼ばれる堅固なトーチカ陣地があり、攻略には数週間かかると見積もられていた。連隊長に夜襲を命ぜられた大隊の若林中尉は二五五高地を奪取し、更に三四一高地をも奪取した。これに乗じた師団は、攻撃を開始し、主防衛線である三六六高地と二五六高地を占領した。たまたま、英軍は香港島へ撤退した。23軍司令部では、土井連隊長の独断専行について軍法会議に付すべきとの声もあがったが、「若林中尉が、前線を偵察中に偶然敵兵力配備の欠陥と警戒の虚を発見し、挺進敵陣地に突入しこれを奪取した」とすることで収拾が図られ、中尉には感状が授与された。「斥候中の挺進奪取」という話が流布した。何とも日本的な問題解決法ではあるが、若林中尉が機敏且つ優れた統率で連隊の鋭鋒として活躍したことは間違いない。この戦闘での英軍捕虜(大尉)は、まず退避させており、同英軍捕虜は「この将校は立派な紳士だ。情け深く礼儀正しい。こんな優れた将校は英国軍隊でも珍しい」と語ったという。

3 ガ島における壮絶な最期（1941年1月14日）

前年11月、ガ島奪回の為同島に派遣された228連隊/38師団の若林中尉は、見晴山死守を命ぜられたが、奮戦するも衆寡敵せず、遂に1月14日戦死した。

冒頭述べたラジオ放送内容を紹介する。同放送では、「私は今ここに彼のガダルカナルに日本男子の忠魂を留めて護国の神となられた若林中尉の雄々しくも崇高な言葉を諸君とともに振り返ってみたいとおもう」として、ガダルカナルにおける若林中尉の凄絶な行動を紹介した。『両手両足を敵弾に奪われた若林中尉は、当番兵に背負われて大隊長のもとに報告に行った時、大隊長は後ろに下がって傷を治療するように優しく言った。その時、若林中尉はにっこりと笑って答えたのである。《大隊長殿、言葉を返して済みませんが、私は生きながら得て偉くなるなどという考へは毛頭ありません。私の持っている一切を天皇陛下に捧げ奉ろうとして私は戦っているのです。私は神国日本の天壤無窮を信じます。私は大東亜戦争の必勝を信じます。私は後に続くものを信じます。香港以来私を中心として戦い抜いた中尉の兵と一緒に死ぬのが私の唯一の願望であります》そしてまた当番兵に背負われて最前線の陣地に帰り、その愛する部下とともに大義に殉じたのである』。

4 見晴山塹壕に中尉の信念3つ書いてあるうちの一つ「私は後に続くものを信ず」と

5 同中尉の日記は涙なくして読めない。

* 国家の戦争指導には多々問題あるも、第一線部隊指揮官が極限状況下において素晴らしい統率を行ったことは特筆すべきだ。正に『中尉』は家族・一心同体なのである。

それを体現したのは一人若林大尉のみではなく殆どの指揮官がそうだったと確信する。

(第百二十二話 了)

第百二十三話 宣戦はしないが、戦争はする！

日露戦争後に変化を見せ始めた日米関係は、次第に悪化し、遂には1941(S16)年12月の日米(英蘭)戦争へと最悪の事態を迎えた。陰謀論に与するものではないが、終局に至る日米関係を概観したい。

- 1 日露戦争後に対日認識は微妙に変化し、日本脅威論、黄禍論が広がり、排日運動が起こり、それらが拡大の様相を見せた。第一次大戦後に設立された国際連盟に日本が提唱した人種差別撤廃決議は親日派から日本脅威論者へ転じたT・ルーズベルト米大統領(1901~1909)によって葬られ、中国に権益を求めたい米国は、門戸開放、機会均等を要求し、石井・ランシング協定は破棄され、九ヶ国条約を締結させられ、日英同盟も解消の已むなきに至った。暗黒の日曜日と呼ばれる世界大恐慌は、ブロック経済化を推し進め、持てる国と持たざる国の確執が増長した。日本は1931(S6)年満州事変を起こしたが、間もなく停戦協定が締結され終息した。満州を巡る主張が容れられず日本は国際連盟を脱退(1933/3)した。
- 2 こうした中、1933(S8)に就任したF・ルーズベルト大統領(1933~1945)は、社会主義的政策を推進すると共に、ソ連を承認し、国民政府にテコ入れを始めた。

1940年「あなた方の子供は如何なる外国の戦争に送られることはない。」を公約に三選を果たしたル大統領だったが、対独戦への参戦の口実を模索し、その為の有効な手段として日本を挑発する手を用いることとした。

表面的な対日協調姿勢をかなぐり捨てたル大統領は、『宣戦はしないが戦争はする』と決意し、各種政策を矢継ぎ早に繰り出し、日本を追い詰め、そして南部仏印進駐で最終局面を迎え、ハル・ノート(1941/11/25)の提示となったのである。



① 対国民政府支援

国民政府への1億ドルの借款供与(1940/12)、武器貸与法成立(1941/3)、フライングタイガース派遣(戦闘機と空軍兵士)、対日長距離爆撃計画の承認(1941/12)

② 対日経済制裁等 ABCD 包囲網の構築

- ・1939(S14)年 日米通商航海条約破棄通告(7月)モラル・エンバーゴ(道義的輸出禁止)航空機エンジン製造設備等(12月)
- ・1940(S15)年 日米通商航海条約失効(1月)、特殊工作機械等の対日輸出の許可制(6月)、国防強化促進法成立(大統領の輸出品目選定権限)(7月)、鉄と日本鉄鋼輸出切削油輸出管理法成立(7月)、石油製品(主にオクタン価87以上の航空用燃料)、航空ガソリン添加用四エチル鉛、鉄・屑鉄の輸出許可制(8月)、航空機用燃料の西半球以外への全面禁輸(8月)、屑鉄の全面禁輸(9月)、航空機潤滑油製造装置ほか15品目の輸出許可制(12月)
- ・1941(S16)年 石油の輸出許可制(6月)、日本の在米資産凍結令(7月)、石油の対日全面禁輸(8月)

③ 軍事的措置 (対日作戦計画の検討策定は当然)

- ・海軍力増強・第二次・三次ヴィンソン案(1938、1940)、両洋艦隊法(1940/7)
- ・太平洋の各島嶼に航空基地や潜水艦基地等、比の軍備
- ・軍需産業のフル活動化

④ 日米交渉で、時間稼ぎ？

- * 一方的に米国にしてやられたと言い張る積りは毛頭ないが、米国の真意と国力を見誤ったのは事実だ。ル大統領の思惑は実った。米国の深謀の延長線上に真珠湾陰謀論がある？それはさておき、日本に有効な対米対抗手段のなかったのを恨む。フーバー元大統領の衝撃の回顧録「裏切られた自由」は一読に値する。

(第百二十三話 了)

第二百二十四話 海軍○事件とは

大東亜戦争間に、「海軍○事件」と称される事件が起きている。「甲」あり、「乙」ありそして「丁」ありである。何故か、「丙」事件は存在しないようだ。誰が如何なる概念区分や考えでこのように名付けたのは解らない。何方かにご教示賜れば幸甚である。本話では、「甲」「乙」そして「丁」の事件を簡単に説明したい。

1 海軍「甲」事件

1943 (S18) 年 4 月来実行中の「い号作戦」は一応成功裏に終了した。この間山本連合艦隊司令長官は、旗艦武蔵を離れ、その幕僚を従えてラバウル基地にあった。前線航空基地の将兵を労うべく、バラレル基地に向かった。該方面は日本の制空権下にあり、危機感はなかった。ところが、その前線視察計画が、艦隊司令部から関係方面に打電されたのだが、この暗号電文は米軍に傍受された。(当時すでに暗号解読に成功)山本長官の視察の経路と予定時刻は米軍の把握するところとなり、ミンッツ太平洋艦隊司令長官は山本の声望の大きさから海軍長官及びル大統領の承認を得て待ち伏せ攻撃を命じた。そして、運命の 4 月 18 日待伏せした P-38 の 16 機に撃墜された。米軍は撃墜の事実のみを公表したのみで、山本大将を撃墜したことは伏せた。新任の古賀長官と共に帰国した山本大将の遺骨は、5 月 17 日帰国し、その日に山本大将の戦死が公表された。6 月 5 日国葬をもって遇された。



2 海軍「乙」事件(「ろ」号事件とも?)

1944 (S19) 年 2 月のトラック島空襲の後、連合艦隊司令部は、パラオにあったが、パラオに対する米軍部隊の上陸があると判断し、司令部要員は 3 月 31 日夕刻にミンダナオ島のダバオへ飛行艇(二式大艇)2 機での移動を急いだが、途中で低気圧に遭遇し、古賀が乗っていた一番機が行方不明、二番機も不時着した。古賀長官は戦死ではなく、殉職とされた。古賀長官の死はすぐには国民に知らせられなかった。セブ島沖に不時着した二番機に搭乗していた参謀長以下は捕虜となり、この際新 Z 号作戦計画書、司令部用信号書、暗号書といった数々の最重要軍事機密を奪われた。新 Z 号作戦計画書、司令部用信号書、暗号書といった数々の最重要軍事機密を奪われた。

山本五十六長官搭乗機の撃墜事件を「海軍甲事件」と呼ぶことから、本件は「海軍乙事件」と呼ばれた。

3 海軍「丁」事件

1944 (S19) 年 2 月 17 日から 18 日にかけて、海軍が絶対国防圏の拠点として重視していたトラック泊地が米機動部隊の猛攻を受け、多数の艦船と航空機を失った。大本营をはじめ各方面に大きな衝撃を与えた。トラック島は無力化されたが、アメリカ軍は攻略にかかる手間を避けて進攻したため、敵中で孤立したまま終戦まで日本軍の拠点として残ることとなった。

日本側はトラック島におけるこの失態を、2 月 16 日-17 日に警戒を緩めさせた指揮官の判断ミスとした。これを「海軍丁事件」として処理している。資料によっては海軍 T 事件と表記するものもある。一応の調査はしたが、既に人事異動等の措置が行われており、“誰が作戦指導をしても大同小異の結果であったろう”との結論だったようだ。指揮関係の異なる多数の部隊が混在しており、それらがぬかりの一因とも。

* “海軍” “事件” で検索すると第四艦隊事件(1935 年 9 月岩手県沖で起きた大規模海難事故)や友鶴事件(1934/3/12 水雷艇友鶴が過大な装備故に転覆した。)がある。

艦艇保有率を制限された海軍の無理な設計が問題だったようだ。詳細は略するが、何れにしても、事件や事故の解決は何とも日本的過ぎる。厳しく責任を追及するのではなく、温情的な処置に留まっている。この体質は陸軍も同じであり、正に日本的?

第百二十五話 英米 可分、不可分論争(日本の南方作戦構想に影響)

日米英蘭戦を決意するに当たって、余り知られてはいないが、英(蘭)と米が可分か不可分かが議論されたが、残念ながら余り突っ込んで論議されなかったとも思える。アメリカの国内政治に日本はもっと関心を持って良かったのだろう。米国の孤立主義を真剣に考慮していない嫌いがある。本話では、米国の対外戦争不参加気運と日本の南進政策の関係に焦点を当ててみたい。

1 1940(S15)7月27日決定の時局処理要綱に見る南方問題解決上の問題点

本要綱に基づく南方問題の解決は、独の英本土上陸等の好機を補足し、香港、英領マレー等を攻略して、英国勢力を駆逐すると共に蘭印を日本の勢力圏に収めることが狙いであった。これは正しく、米英を分離し、戦争を英国又は英蘭二国のみ限定し得ることを前提としたものであった。要領第3条の四には、『武力行使に当たりては、戦争対手を極力英国のみに局限するに努む。但し、この場合に於いても、対米開戦は之を避け得ざるることなるべきを以て、之が準備に遺憾なきを期す。』とある。



米英可分ならば、南方武力行使の前後に、米の対日全面禁輸を受けても、日本は戦争相手を英蘭に限定して南方資源地帯を攻略し自給自足態勢の確立が可能であるが、米英不可分ならば、日本は米英蘭三国と交戦せざるを得なくなり、極めて厳しい状況に陥るのである。英米可分か不可分かは正に国家の命運を左右する重要な判断であった筈だ。

英米可分は陸軍が主張し、海軍は英米不可分論であったようだ。英米不可分論であったならば、海軍は対米戦勝利の見込みがあったのかが問われねばならぬが、今はその話は擱く。

英米可分は可能であったのかどうかを見てみたい。

2 1941年当時の米国の状況

日本が真珠湾攻撃を敢行するまでの米国内の孤立主義の勢力は極めて堅固であった。米国の孤立を支持する者が、80%を超える世論調査は、単なる厭戦気分だけで醸成されたものではなかったとされる。米国民の信念にも等しいものだった。錚々たる人物も米国の孤立主義を訴えていた。一方、F.D.R(フランクリン・ルーズベルト)大統領は、その表面的な言説とは裏腹に、英国チャーチルとの関係もあり、何とかして参戦したいと焦っていた。彼が対日戦を望んでいたかどうかは不明だが、所謂裏口参戦を模索していたとも云われる。

3 対米戦回避の方策はないか？

日本がマレー半島から蘭印を攻略し、比島(当然真珠湾など論外だが・・・)を避けて攻略していたら、米国は参戦の口実を得ることができたのか？F・D・Rは日本の南進牽制の為にハワイ及び比島の戦力増強を図っていたが、牽制にもならなかった。日本は蘭印のみに対して資源獲得を強要するか、或いは英蘭のみを攻撃していたら、戦争は違った局面を迎えたであろうし、自ら先制し得ないル大統領は切歯扼腕したのではないかと思えるのだが・・・。斯様に指摘している米戦略研究所があり、強ち荒唐無稽ではない。何れにしても、米国の孤立主義を十分に認識していなかった、或いは軽んじたというべきか？知米派の多かった海軍や外務省はどのような認識を持っていたのだろうか？

処理要綱の要領で英蘭限定に努めると謳っているのであれば、それを追求すべきであった筈だ。日本は、日米衝突は不可避であり、米国は何としても参戦すると思込んでいたのか？10倍の巨人と戦わずして生き延びる方策を追求することにもっと努力して欲しかった。狡猾なる大統領はあらゆる手を使って日本を挑発したのだろうか・・・

* 日本の軍事戦略は、残念だが、どうもちぐはぐだ。英米可分を狙うのだったらそれを追求すべきだったのだ。

第百二十六話 忘れられた軍神（1）

（副題：我が将兵の敢闘、此処にあり！（5））

幼い頃に、寝物語に軍神の話を聞いたものである。長じてから、戦史の中で知ることはあっても、それ以上でもそれ以下でもなかった。大東亜戦争間に軍神と称えられた人には誰が居るのかと思って、調べてみた。

1 軍神とは

軍神とは、戦勝や武運長久を司る神であるが、近代日本では、壮烈な戦死を遂げて神格化された軍人を云う。戦死した将兵は、靖國の神として祀られるが、その神のなかでも別格とされる。（鹿島神宮・香取神宮は軍神を祀り武の神様である。）

山室建徳氏はその著において、軍神の三類型として以下を示している。

I	廣瀬武夫、橋周大、加藤建夫	部下を思いやりながら戦場で斃れた中年の指揮官
II	乃木希典、東郷平八郎	大決戦を勝利に導いて英雄となった将軍・提督
III	爆弾三勇士、特別攻撃隊	死を免れない作業を集団で遂行した若手将兵

*近代日本最初の軍神は廣瀬武夫、木口小平（ラッパ手）は軍神とはされなかった。

爆弾（肉弾）三勇士は軍神とはされなかったが、同等の扱い

2 大東亜戦争間における軍神

（1）支那事変（1937/7/7～）

ア 杉本五郎中佐（1937/9/14）

山西省広靈県において中隊長として従軍し、敵陣に突撃して重症を負い、直立不動の姿勢で宮城の方角へ敬礼をしたまま絶命した。彼の遺書「大義」は、終戦に到るまで版を重ね 29 版、130 万部を超える大ベストセラーとなった。

イ 南郷茂章海軍少佐（1938/7/18）

S13/7/18 の南昌飛行場攻撃の際に、空中戦を繰り広げた敵機と衝突して、搭乗機が空中分解して戦死。海軍の荒鷲三羽鳥の一人、マスメディアは軍神とはしていない。秦賢助著「軍神伝」（S17 刊）で取り上げている。

ウ 西住小次郎大尉（1938/5/17）

戦車小隊長であった西住小次郎大尉は、第二次上海事変から徐州会戦中の昭和 13 年 5 月 17 日に流れ弾に当たって戦死するまでの間、30 回以上の戦闘に参加した。菊池寛による小説「西住戦車長伝」が東京日日新聞・大阪毎日新聞に連載され、1940 年（昭和 15 年）松竹により映画化された。

（2）日米英蘭開戦後（1941/12/8～）

ア 九軍神（二階級特進）（1941/12/8）

真珠湾攻撃において、甲標的に乗組み、未帰還となった海軍中佐岩佐直治ら以下の 9 名が「特別攻撃隊の偉勳」として軍神とされた。（1942 年 3 月 6 日海軍省発表）・岩佐直治 中佐 ・横山正治 少佐 ・古野繁実 少佐 ・広尾彰 大尉 ・佐々木直吉 特務少尉 ・横山薫範 特務少尉 ・上田定 兵曹長 ・片山義雄 兵曹長 ・稲垣清 兵曹長



潜航艇は 1 隻 2 人乗りで、生存者の酒巻和男少尉は捕虜となったのだが、大本営発表ではこの事実は伏せられた。三机湾に慰霊碑、文学作品：坂口安吾の『真珠』、菊池寛、吉川英治等の錚々たる文筆家が激賞。また、詩人佐藤春夫、斎藤茂吉、高浜虚子の献句あり。マスメディアで大々的に報道された。偉大なる軍神の母が喧伝された。

（以下 第百二十七話 に続く）

第二百二十七話 忘れられた軍神（2）

（副題：我が将兵の敢闘、此処にあり！（6））

イ 松尾敬宇中佐他（軍神とはされなかったが、・・・）（第三十話関連）

シドニー湾攻撃に特殊潜航艇艇長として参加した松尾敬宇大尉は、魚雷発射管の故障により攻撃が叶わず、艇を敵艦へ体当たりさせることで魚雷を爆発させようと図ったが、これも失敗。部下とともに自決した。死後2階級特進し、豪海軍より丁重に葬儀が行われた。松尾大尉以下の戦死は当時の日本で美談視されていたが、1942年10月5日、遺骨が日本に送還されてきた際に、海軍は報道各社に「特殊潜航艇4勇士は軍神扱いせざることを申し入れた。これは、真珠湾攻撃の際に特殊潜航艇で戦死した「九軍神」の希少価値を下落させたくない、との配慮とみられている。

ウ 加藤建夫少将

大東亜戦争中のベンガル湾上空におけるイギリス空軍機との空戦で被弾し、1942年に戦死した。軍神とされた理由としては、加藤は日本軍史上最



多の7枚の感状（個人感状・部隊感状合わせ）を受賞の古参の戦闘機操縦者であり、何よりも高潔

ながらも愛嬌があり、誰からも信頼されるその人柄の良さ、軍人として優れた指揮官であった事からとされる。また、加藤はその名を配した加藤隼戦闘隊として有名な帝国陸軍飛行第64戦隊隊長であり、後に加藤や部下の戦隊隊員達の活躍や最期を描いた戦争映画「加藤隼戦闘隊」が作られ、同隊の部隊歌も有名となった。

エ 関行男中佐

レイテ沖海戦(1944/10/23)において、神風特別攻撃隊・敷島隊隊長として指揮し、自らもアメリカ艦船に突入し戦死した。特攻隊の戦死者第1号とされる。死後は軍神として畏敬の対象とされた。関大尉は、10月25日の4度目の出撃で、（単機若しくは僚機と共に）護衛空母セント・ローに突入し撃沈させた。

オ 山崎軍神部隊（1943/5/29）

米軍は、アリューシャン列島の奪回を目指して、1943/5/12、アッツ島上陸を開始した。アッツ島は、山崎保代陸軍大佐指揮下の日本陸軍が防衛していた。日本軍は反撃もまもなく、厳しい戦いを強いられた。大本営はアッツ島、キスカ島の確保を断念、5月20日、アッツ島の放棄と、キスカ島からの撤退を発令した。アッツ島守備隊二千数百名は、上陸したアメリカ軍と17日間におよぶ激しい戦闘の末、5月29日に玉砕した。

カ 国葬もて遇された山本五十六大将

1943/4/18、連合艦隊司令長官山本五十六大将は、搭乗機を撃墜され戦死した。（海軍甲事件）6月5日、山本元師国葬を日比谷公園で挙行された。皇族・華族ではない平民が国葬にされたのは当時、山本だけだった。

3 軍神の母訪問記（「軍神」281pから引用）

『老翁の傍らに背を丸めてポツネンと座ってをられる母堂はにじみ出てくる涙を笑ひにまぎらさうとしてか、唇の端にかすかに笑を見せられたが、その笑いは明らかにひきつって、記者は胸をかきむしられる思ひであった。泣いてはならない、直治はもう私の子ではない、私はお前の戦死をよろこぼう—母堂の心をさういう風に付度するのは記者のいたづらな思ひ過ぎであらうか』

4 建立された軍神像のその後の取り扱いはあんまりだ。その豹変ぶりは異常だ。

* 全ての国民が共感し、涙した軍神。彼等の想いと生き様を再確認すべきだ。

（第二百二十七話 了）

第二百二十八話 戦争間に於ける戦没者の慰霊・顕彰

戦争間における戦没者の慰霊顕彰は、どのように行なわれたのだろうか？支那事変以降の戦争による死没者（軍人・軍属及び準軍属のほか、外地において非命にたおれた者、内地における戦災死没者等をも含む者とする。）は、約310万人であるとされ、うち海外戦没者は約240万とされる。日本は戦争を戦いながら、如何に戦没者の慰霊顕彰を行ったのかを管見することにしよう。

1 戦地及び内地における戦没者慰霊祭の斎行

- (1) 1937(S12)年11月12日 天津で戦没者慰霊祭斎行 By 全国神職会の慰霊使
爾後、大きな戦闘のたびに現地です慰霊使による慰霊祭が斎行されるようになった。
- (2) 1937年11月18日 東京で最初の戦没者慰霊祭
- (3) 1938(S15)2月上海事変の戦没者の慰霊・顕彰の「表忠塔」建立

2 靖国神社への合祀

支那事変の拡大に伴い戦没者も急増し、内地に環送された戦没者の合祀等を含めた靖国神社の体制もそれに応ずる必要があった。

- (1) 1938(S13)年2月 英霊を弔う皇后の和歌が刊行された。
- (2) 権宮司の設置と軍人宮司の任命
- (3) 1938(S13)4月 臨時大祭の斎行 満州事変及び支那事変の戦没者 4533名の合祀

3 戦没者出身地における慰霊顕彰（公葬、招魂社創建等）

- (1) 戦没者の出身地では、神道式あるいは仏教式の公葬が営まれるようになり、招魂社の創建と記念碑建立の動きが盛んとなった。
- (2) 内務省通達 “招魂社また記念碑の建設に関する件” 発した。
合同の記念碑建設を推奨、維持についても恒久的方策を

4 招魂社を護国神社へ

- (1) 1938(S13)年 内務大臣 「招魂社制度確立に関する件」の諮問と答申
- (2) 1939(S14)3月 内務省告示 招魂社の社名を4月1日から護国神社と改める旨。
道府県当たり一社基準、戦争末期には（最終的には）46社に

5 記念碑等の建立

- (1) 1939年2月 内務省「支那事変に関する碑表建設の件」発す
一市町村一基の原則、
陸軍は護国英霊の榮域として尊崇の中心たらしむると意義づけ
- (2) 1939年7月 「大日本忠霊顕彰会」が設立（一市町村一基、外地は主要戦場一基）

6 陸軍従軍神職制度

1939(S14)年8月制定（師団に3名、兵站監に1名、独立旅団に1名）

7 満州国に建国忠霊廟創建 1940年7月15日 満州国の実質的な靖国神社

8 九軍神の合同海軍葬 1942年4月8日

（忠霊塔の建設と慰霊祭の挙行が相次いだ。）

9 未合祀戦没者の合祀 1946年1月19日～20日

19日夜招魂祭を行い、翌20日臨時大祭を執行して未合祀の戦没者を合祀

* 今猶、靖国問題が解決に至らず、国内外の慰霊碑・忠霊塔等、陸海軍墓地等が荒廃している現状には心が痛む。早急なる解決を望むものである。国家の明確な意思決定が肝要だ。

JPSN 「一言 言いたい」の拙稿「旧軍用墓地の尊厳保持を」「海外戦没者の慰霊・追悼に関する現状と課題」「我が国の戦没者慰霊の現状と課題」を参照

(<http://www.jpsn.org/opinion/word/>)



第百二十九話 陸軍の良心を体現 今村大将

海軍は開明的・理性的そして良心的であり、陸軍は横暴で知性の欠片もなく狂信的であると思われているようだが、果たして陸軍の将兵全てがそうだったのだろうか？“一事をもって万事を量る”の類であると思う。その陸軍の良心を代表するのが今村均大将ではなかろうか？武士道的日本軍人の典型とも、ストイック過ぎ、自省が強すぎとも、徳の人・情の人、人情家で温厚・篤実等々と評される。当然、部下にも慕われた。

1 今村均大将来歴

1886 (M19) 年 宮城県仙台市生まれ 陸士 19 期

歩兵、英大使館付武官等 参謀本部作戦課長、第 16 軍司令官として蘭印作戦指揮

1942 (S17) 年 11 月から第 8 方面軍司令官 司令部ラバウル (ニューブリテン島)

戦後戦犯 (禁固 10 年) 1968 (S43) 年 10 月逝去 (享年 82 歳)

(以下代表的なエピソードを幾つか)

2 満州事変勃発時の参謀本部作戦課長として

- ・ 関東軍の独断と朝鮮師団の越境に軍事課長永田鉄山と共に反対
- ・ 関東軍との折衝のための渡満した際 板垣征四郎 (士 16) 高級参謀や石原莞爾 (士 21) 参謀に面罵され激怒し酒席から退席
- ・ 後に反省して曰く、厳罰に処すべきだったと、後の下克上に繋がったと指摘



3 蘭印作戦 (1942/1/11~3/9) の指揮 (第 16 軍司令官) とその後の軍政

- ・ パレンバン空挺作戦を指揮し、ジャワ上陸作戦では 9 日間で約 10 万の連合軍を無条件降伏
- ・ 停戦時、蘭印軍司令官停戦条件交渉 強圧的でなく、礼を尽くした話し合い
- ・ 攻略後、政治犯 (インドネシア独立運動の指導者) を解放、各種施策により独立運動を支援、独立歌のレコード制作配布
- ・ 攻略石油精製施設の復旧、石油価格の半額化、学校建設等、治安維持に努力等寛容な軍政を実施
- ・ 軍政の基本指針 家族同胞主義で、徹底した融和政策を採ると幕僚に
- ・ 寛容な軍政に対する批判があるも、示された「占領地統治要綱」の趣旨 (“公正な威徳で民衆を悦服させ”) を引用して要綱を改正する前に自分を免職せよと抵抗

4 ラバウル守備隊の指揮官 (第 8 方面軍司令官) (1942/11/20~終戦)

- ・ ラバウルの要塞化 (堅固な地下要塞、工廠等) → 米軍はラバウル攻略回避
- ・ 自給自足体制の強化 自らも率先して畑仕事 → 現地自活可能な態勢完成、備蓄

5 戦犯と減刑

- ・ 8 方面軍司令官としての責任 死刑が、現地住民の証言などにより禁固 10 年に (スカルノによって減刑)
- ・ 16 軍司令官の責任 オランダ軍による裁判で無罪
- ・ 1949 年巣鴨拘置所収監 → 元部下が劣悪な南方で服役しており、マヌス島収容所行きを希望し、マ元帥は真の武士道に触れたとしてその希望をかなえた。
- ・ 刑期満了帰国後：一隅の謹慎小屋 (3 畳) に自らを幽閉し、反省、質素な生活、回顧録の印税を遺族のために用いた。

6 回顧録に

- ・ 陸大教育の弊害を指摘、政治に口だすべきではないと批判

* 大将の高潔な人格は如何にして育まれたものなのか。大将のエピソードから窺われる姿は、在りうべき武士道的日本軍人である。人格識見ともに優れた多くの陸軍将兵が存在していたのは事実であると確信する。

(第百二十九話 了)

第三百十話 水葬の島:メレヨン島

個人的なことだが、小生は初級幹部時代に、第二代第一混成団長であったK将補にお仕えし、団長が中隊長として体験されたメレヨン島の飢餓状況下における指揮官の苦悩に関するお話を伺う機会があった。最近、「骨が語る兵士の最後」(檜橋修一郎著 筑摩書房)の、第5章3 同環礁での遺骨収集体験記を読んで「水葬の島」と称されることを知った。「戦わずして玉砕した悲劇の島」とも云われる。

1 メレヨン島に飛行場建設と防御力強化そして米軍は上陸を回避

小規模の監視所が設けられていたメレヨン島も、絶対国防圏の防御力強化及びマーシャル諸島での戦いに備え、飛行場建設部隊とその警備、防空部隊が上陸したのが、1944(S19)年2月末である。同島守備隊は、独立混成第五十旅団に改称された。



サイパンの陥落後、米軍はメレヨン島を無視して攻撃続行した。同島への補給は潜水艦により細々で行われたが、輸送任務の潜水艦も安全ではなかった。

2 メレヨン島慰霊碑碑文に見る苦難

『第二次世界大戦の戦局が急を告げていた昭和19年2月数度に亘り上陸した海軍将兵及び3千5百名と同年4月12日上陸した陸軍将兵3千3百名とより成る西カロリン諸島メレヨン島守備部隊は寧日ない米軍機の爆撃に曝されながら日夜防衛築城訓練に挺身したが戦況の悪化に伴い食糧医療品弾薬の補給は意に任せず同年7月サイパン島の陥落に続いてグワム島などの守備部隊が玉砕するに及び補給は全く絶え孤立無援となった 現地自活のための懸命な農耕と漁撈にも拘らずサンゴ礁の土壌は農作に適せず不備な漁具による漁獲は少なく食糧は日を逐うて窮乏し一時は主食1日一人百グラム給養となって生命保持の限界をはるかに割り全島に鼠トカゲ類の影を見ない状態となった■■熱病アメーバー赤痢等の風土病が蔓延し医薬品は欠乏して斃れる者が続出し総員6千8百名のうち爆撃による戦死者を含め実に5千2百名を失うに至った

私達は終戦最初の復員船回航のおかげで痩せ細った身を辛うじてこの島から生還し得たがその中の一部は上陸直後別府病院で亡くなった

この島での1年有半の体験は私達の脳裡深く刻み込まれて終生忘れることは出来ない 終戦から20年を経た今も尚私達は椰子の根元に埋葬した多くの戦友達の慟哭を聞くそして断腸の想を遠く南海の孤島に馳せ遺族の上に思を致せば万感胸に迫って慰問の辞を知らない 茲に生還者一同相寄ってメレヨン会を結成し亡き戦友の英魂を弔慰するため相扶けて陸軍部隊の主力であった南洋第5支隊編成の地福山市を選びこの碑を建つ』と

3 飢餓の状況

メレヨン島海軍医長によれば、1944年の一人当たりの主食の摂取量は以下の通りとのことである。「4月12日:720g、5月16日:580g、6月15日:500g、7月14日:410g 8月10日:360g、8月21日:290g、9月1日:240g、9月21日:190g、10月21日:100g」であったという。飽食の時代の今日からは想像も出来ない量ではないか。

4 葬法について

戦死者の数は資料により差異があるが、何れにしろ5000名の死者を埋葬する場所はなく、環礁の南側の小島で1200名を水葬にしたという。海軍は水葬が一般的であるが、陸軍は土葬或いは火葬が一般的であった。戦死率は80%近く、殆どは餓死だ。

尚、1966年来の遺骨収集で、3020体を収骨しており、残り1893体となる。この内、水葬1200体であるので、陸地部分には693体が残されているという。(上掲書196p)

5 S21年の安倍文部大臣の寄稿が物議を醸した。動機は不明だが、海軍側指揮官宮田大佐は1946/7/18自決し、最高指揮官北村少将は遺族への訪問を終えた1947/8/15に自決した。K団長の高潔な人格を考えると文部大臣の言には異議を感ずる。

第三百一話 精強な帝国陸軍師団も遂には案山子兵団と

帝国陸軍は言うまでもなく、歩兵師団を中核とした軍隊であり、その師団数の変遷等を見れば、日本陸軍の動員状況がクリアーになる。本土決戦を覚悟した際には、根こそぎ動員までしたが、その実態は悲しくなるばかりだ。案山子兵団と揶揄されたのも頷ける。

1 師団の種類

常設師団(甲師団編成) 4個歩兵連隊制→3個歩兵連隊の師団も

抽出した3個連隊で一個師団を編成

特設師団 常備師団の留守部隊等を以て編成、3個歩兵連隊制へ、100番台の番号

治安師団(乙編成師団) 大陸で治安維持に任ずる師団 約12000名

警備師団(丙編成師団) 治安師団から砲兵力欠

丁編成師団 独立混成旅団から改編された師団 独立歩兵大隊で編成

2 師団数の変遷

(1) 支那事変勃発時点の師団数

17個師団

(2) 支那事変拡大に伴う師団の増強

欠番師団の復活と特設師団の新設

24個→29個→31個→34個→40個(治安師団増設)→44個(1939/6)

→48個(+8 -4)→50個→51個(1941/12)

(3) 日米英蘭戦開始後

ア 総数51個、うち三単位師団が44で四単位師団が7個

57個(1942/2 +6個独混旅団から改編)→58個→60個(1943/3)→70個

→71個→72個→78個(1944/4)→81個→85個(1944/6)→

94個(+11個、消滅2個(グアム、サイパン))→96個→97個→105個(1945/1)

イ 本土決戦用師団の増設

兵力の欠乏を補うため、満州や北方からの部隊転用が行われたほか、「根こそぎ動員」と呼ばれる現役兵から国民兵役に至るまでの大量召集と部隊新設が進められた。一応、沿岸配備師団と機動打撃師団に区分されていた。

根こそぎ動員は、以下の通り、大きく3回に分けて実施された。

- ・第一次兵備(1945年2月28日)23個増
- ・第二次兵備(4月2日と6日)11個増
- ・第三次兵備(5月23日)19個増 その後消滅3個(沖縄、比)、増設8個

(4) 終戦時

164個師団(歩兵師団のみ)

3 日本陸軍の兵力推移(動員率1930:0.75%、1940:4.6%、1944:10.3%とも)

1936:29万 →1937:95万 →1938:113万 →1939:124万 →1940:135万

1941:185万 →1942:210万 →1943:365万 →1944:398万

終戦時 550万人

4 本土決戦師団の実態

沿岸配備師団は特に、装備は貧弱で、「はりつけ師団」や「かかし兵団」と揶揄され、兵数・火力ともに劣っていた。戦士としての練度は低く、装備のいきわたらない弾薬の欠乏した徒手空拳に近い集団であり、銃剣30%以下、小銃40%以下、小縦弾5%以下とも云われる。

* 国家総力戦とは言え、斯くまでせざるを得なかったのかと慄然とする。

(第三百一話 了)



第百三十二話 かつては戦友だった！（1）

日清戦争の結果日本に割譲（1895/4/17）された台湾及び日韓併合（韓国併合に関する条約 1910/8/29）による日本となった朝鮮、これら外地にあった国民も、大東亜戦争に色々な形で参加している。現在韓国とは最悪の関係だし、台湾との関係も中国に配慮してやや疎遠である。これら両国民の大東亜戦争への参加状況を概見することでかつての絆が取り戻されれば幸いなのだが・・・

1 支那事変勃発後にこれら外地に徴兵令施行

戦争の長期化が見込まれることから、1938(S13)年2月に朝鮮人に対して陸軍特別志願兵令が施行された。台湾人に対する陸軍特別志願兵制度は1942(S17)に施行された。特別志願兵制は海軍にも適用された。尚、台湾原住民志願者で編成された高砂義勇隊も存在する。陸軍士官学校を卒業し或いは学徒動員により軍務に赴いた者もいる。



2 朝鮮人日本兵

(1) 陸軍士官学校及び陸軍幼年学校への留学

朝鮮人留学生の第一期生は、陸士11期生であり、明治32年卒業、日本では寺内寿一元帥が11期生である。その後、当初は飛び飛びに、戦況逼迫した段階では各期に入学している。彼等は、日本統治終了後、韓国軍の主力として朝鮮戦争でも指導的役割を果たし、1969年迄の陸軍参謀総長は旧日本軍出身者であった。他に首相、大統領等を輩出している。

(2) 陸軍兵士等としての採用

陸軍に朝鮮人が大量採用されたのは、1910年創設の憲兵補助員制度によるもので、軍属とされ、制度廃止に伴い警察官に転じた。

朝鮮人が一般の兵卒として入隊することは出来ず、陸士を卒業するか、旧大韓国陸軍から転籍した者に限られていた。海軍の士官養成諸学校は朝鮮人の入校を認めなかった。尚、1944年からは徴兵も行われた。徴兵数は1944及び45の二カ年で陸海計13万との資料がある。学徒志願兵が3117人。

陸軍特別志願制度による訓練所入所者数（入隊者数とほぼ同義）（括弧は倍率）

1938：406人（7.3倍）、1939：613人（20.2倍）、1940：3060人（27.6倍）

1941：3208人（45.1倍）、1942：4077人（62.4倍）、1943：6000人（50.6倍）

朝鮮人の軍人・軍属は、24万2341人とされる。

分類	動員数	不明または戦没	不明または戦没率
全体	242341人	22182人	9.2%
軍人	116294人	6178人	5.3%
軍属	126047人	16004人	12.7%

(3) 朝鮮出身兵の処遇について

陸軍は出身兵の取り扱いに対して、細やかな配慮をするよう通達している。飲食物、歴史・伝統・風俗・習慣・生活様式等を理解し、言葉遣いにも注意すべし等々驚く程細やかだ。

(4) B C級戦犯結果 219人が有罪 内14人が死刑

(5) 弔慰金等の給付

日本国籍を離脱した者に対しては、本来は1965年の日韓基本条約並びに所謂請求権協定等により、戦没者遺族等に対する弔慰金の支給は、韓国政府が支払う義務があったが、様々な歴史的経緯と政治的事情に鑑み、日本政府は弔慰金、見舞金を支給した。戦没者ご遺族 弔慰金（一時金）260万円等

台湾人日本兵は次話に譲る。

第百三十三話 かつては戦友だった！（2）

3 台湾人日本兵

(1) 概要

大東亜戦争が激化し、1944年9月には台湾人にも兵役義務が課せられた。台湾から戦地に赴いた者約21万人、その内約6千人が高砂族だった。戦後、国民党は台湾人元日本兵を強制的に徴用（3万人）し、中国大陸に派遣されて共産軍と戦い、国民党が敗退すると共産軍の捕虜となった。その共産軍は国際法を無視して、捕虜になった台湾兵を朝鮮戦争で韓国に派遣してアメリカ軍と戦わせたと云う。

(2) 支那事変勃発後の軍夫募集と特別志願制度の施行

ア 台湾総督府による軍夫及び通訳の募集

1937(S12)年台湾総督府は、部隊内で雑役に従事する軍夫の募集を開始した。また、中国戦線における翻訳の必要から多くの軍属が募集され福建語、広東語、北京語の通訳に当たった。その人数は軍事機密扱いで明らかではない。

イ 特別志願兵制度及び徴兵制度施行

陸軍特別志願兵制度が施行されると多くの台湾人志願者が殺到した。海軍特別志願兵制度は1943年5月12日に発表され、朝鮮と同時に実施された。

その競争率は、以下の通りである。

1938:6.1倍、1939:20.1倍、1940:27.6倍、1941:27.6倍、1942:48.2倍

1943:50.1倍

その後戦局の悪化により1944年9月から開始された徴兵制度は、1945年に全面实施となっている。

分類	動員数	不明または戦没	不明または戦没率
全体	207183人	30304人	14.6%
軍人	80433人	2146人	2.7%
軍属	126750人	28160人 *30306人とも	22.2% *15%

(3) B C級戦犯裁判 173人有罪、死刑26人

(4) 戦没者遺族等への補償、給与未払問題、軍事郵便貯金の返却等の問題がある。未解決部分もあるが、日本と台湾との国交がなく、調整が進んでいない。

(5) 靖国神社への合祀 26000人が合祀

合祀に関しても種々の見解があり、問題となったこともある。

(6) 李登輝氏は陸軍少尉として従軍、氏の兄は戦死し靖国神社に合祀

31年間インドネシアのモロタイ島で終戦を知らず戦った日本名中村一等兵

4 高砂義勇隊(軍)

台湾原住民により編成され、フィリピン、ニューギニアなど密林地帯の戦場に投入するために創設された。隊員は軍属であり軍人ではないが戦闘に参加し、戦死者の割合が作戦を共にした軍人よりも多かったといわれている。7度にわたって編成され、合計1,800~4,000名の原住民が参加したと考えられている。伝統的な生活を営む高砂族の勇敢で純朴な性質や、耳が良く、夜目が効き、素足で音も無く夜の密林を駆け巡ると言われる程の身体能力の高さが、東南アジアの密林地帯において有用な戦力になると期待された。一部の部族には首狩りの風習が残るなど勇敢であること、強きことは原住民にとって美德であった。



* 日本とこの両国とは難しい問題があるが、かつては同胞であり戦友として共に戦った絆がある筈だ。そこに想いを致すのはどうなのだろう？

(第百三十三話 了)

第百三十四話 国民党軍の無道な作戦と日本軍の人道対応

支那では古来より、焦土作戦や河川決壊作戦が常套手段であり、それが、支那事変でも敢行されて、日本軍に打撃を与え、それ以上の悲劇を国民に齎した。堅壁清野(けんぺきせいや)と呼ばれる城壁に囲まれた市街地内に人員を集中し、城外は焦土化する作戦を南京で大々的に行い、黄河決壊事件と呼ばれる黄河氾濫作戦がそれである。その概要を見よう。

1 黄河決壊事件(1938(S15)年6月)

(1) 黄河決壊事件に至る迄の経緯等

盧溝橋事件に端を発した支那事変は、北支から次第に、第二次上海事変(1937/8/13～10/26)、南京戦(1937/12/1～)、徐州攻略(1938/4/17～)と支那全土に拡大していった。大本営は、徐州作戦の制限ラインを蘭封までと定めていたが、1938(S15)年6月2日、北支那方面軍は、そのラインを越えての追撃を命じた。

日本軍が京漢線に至り、そして漢口に脅威が迫ることを恐れた国民党軍は、蒋介石の承認を得て、「黄河氾濫」により日本軍の進撃を止めるべく、開封北方の堤防上に、内径10m、深さ15mの穴多数を掘削し、横坑で接続してあった。5月下旬頃から準備が開始されている。

(2) 堤防破壊とその影響

蒋介石は、日本軍の背後を突く形での堤防破壊を命じたが、担当将軍は国民党軍の撤退終了まで延期していた。6月7日失敗、6月9日場所変更して破壊実施、続いて6月11日、12日にも行った。水没範囲は、11都市と4000村に及び、3省の農地が農作物ごと破壊、水死者100万人、被害者は6000万人とも云われる。史上空前の人災・環境破壊である。



(3) 日本軍の対応

12日1700には堤防修理に出動、筏舟百数十艘を出して住民と共に救助活動を行い、且つ住民避難誘導用の堤防と河道を築いた。日本軍には殆ど被害はなかった。国民党軍は、現場に近づく日本軍に攻撃を加えた他、住民と共に実施中の水防作業をも妨害した。日本軍により救助された避難民は、開封方面1万、朱仙鎮、通許方面5万、慰氏方面2万、その他数万であった。何たる無道だ。軍事上の必要性(?)と信じれば、自国民すら見殺しにする異常さに驚くほかない。

(4) 報道等

中国側は、日本軍が行ったとの偽情報を発信した。各国メディアは慎重姿勢を示したという。当然だろう。それにしても彼等の厚かましさに恐れ入る。

2 堅壁清野

国民党軍は、本作戦を、支那事変期を通じ、日本軍・中国共産党軍双方に対して行った。焦土化の対象は、軍事施設や食糧倉庫のみならず田畑や民家まで及んだ。南京戦では、日本軍の遮蔽物に使われる可能性のある建物すべてを焼却したとされる。

蒋介石は、中国軍の83個師団を江北に撤退させる退却掩護作戦の一環として、南京の固守を命じ、日本軍進撃を食い止めるために橋梁、道路を徹底的に破壊し、家屋を焼き、食料を持ち去った。南京城外15マイルの空野清野作戦であった。

流言に惑わされた国民党軍による放火(焦土作戦)で起きた長沙大火(1938(S15)年11月13日)もある。

- * 日本軍は時に濡れ衣を着せられ、反論も真面に耳を傾けて貰えず、悪評のみが拡大していった。黄河決壊事件時における日本軍の対応など、まだまだ知られるべき事柄がある筈だ。それらに目を向けるべき秋が来たのではないか?

第百三十五話 武士道精神の発露！敵国トップの死に哀悼の意

日本人の心には今なお脈々と武士道精神が生きている。戦争という極限のなかでも、遺憾なくそれが発揮された事例は枚挙に暇ない。日露戦争時の乃木大将の敵将ステッセル將軍への会見はその精華である。同様の事例は多々あるものと思料するが、本稿では、大東亜戦争時の最後の第42代内閣総理大臣であった鈴木貫太郎の事例を紹介する。

1 鈴木貫太郎（1968/1/8～1948/4/7）略歴

日清・日露戦争に従軍した海軍軍人、海兵14期生。海軍大将。部下からは「鬼貫」と呼ばれた。予備役編入後侍従長（1929(S4)年）となり、二二六事件で奇禍に遭い、瀕死の重傷を負った。爾後、枢密院議長等を歴任、小磯國昭首相の後を受けて内閣総理大臣に就任した。1945(S20)年4月7日、時に77歳2ヶ月であった。今現在に至るも最高齢での総理就任である。表面的には兎も角、鈴木は自分の内閣を「終戦内閣」とする決意だった。8月14日ボッドム宣言受諾、15日、日本は終戦を迎えた。鈴木は、8月17日総辞職した。



1948(S23)年4月17日、肝臓癌で薨去、享年81であった。

2 米国F・ルーズベルト大統領の突然死と鈴木首相の弔意

- (1) 1945(S20)年、3月10日の東京大空襲の余煙燻り、硫黄島栗林兵団は玉砕（3月26日）し、沖縄では死闘が繰り広げられている最中の4月12日、米国F・ルーズベルト大統領が脳卒中で突然他界した。鬼畜米英の首魁とみられていた大統領の突然の死（世界を震撼させた事件）に対する日独の対応は全く異なった。
- (2) 独のヒトラーは、ラジオ放送を通じ、「扇動者であり、愚かな大統領として歴史に残るであろう。運命は歴史上最大の戦争犯罪人ルーズベルトを地上より遠ざけた。」等と述べた。
- (3) 一方、鈴木貫太郎首相は、同盟通信社の短波放送により、「今日、アメリカがわが国に対し優勢な戦いを展開しているのは亡き大統領の優れた指導があったからです。私は深い哀悼の意をアメリカ国民の悲しみに送るものであります。しかし、ルーズベルト氏の死によって、アメリカの日本に対する戦争継続の努力が変わるとは考えておりません。我々もまたあなた方アメリカ国民の覇権主義に対し今まで以上に強く戦います。」という談話を、世界へ発信している。
- (4) この鈴木首相の談話に深く感動した米国に亡命中の文豪トーマス・マンは、いたたまれず、英BBCで「ドイツ国民の皆さん、東洋の国・日本には、なお騎士道精神があり、人間の死への深い敬意と品位が確固として存する。鈴木首相の高らかな精神に比べ、あなたたちドイツ人は恥ずかしくないですか」との声明を発表した。

ニューヨーク・タイムズも鈴木首相の談話を驚きをもって報じ、スイスの新聞も「敵国元首の死に哀悼の意を捧げた日本の首相は、誠に立派だ。これこそ日本武士道精神の発露だ。ヒトラーが、この偉大な指導者の死に、誹謗の言葉を浴びせたのに比べ、何という大きな相違か」との記事を社説に載せた。

また世界各国で、首相の哀悼の意の表明は、大きな反響を呼んだのである。

- 3 米国新聞の論調は、鈴木内閣の出現が平和への序曲であったと認識している由、確かに古武道的な鈴木貫太郎大将でなければ、極めて困難な局面を乗り越えられなかったであろう。正に、武士道を体現した人物である。

* 現に戦っている相手に対して敬意をもって対するのが、武士道精神でもある。死者を鞭打ち、墓を暴く国もあるが、我が国武士道はさようなことは断じて許さない。死者は敵味方関係なく鄭重に扱われるべきである。

第百三十六話 ノブレス・オブリージュ

ノブレス・オブリージュとは、高貴であるが故の義務と訳される仏語だが、皇族、華族は正に生まれながらの責務を負っている筈だ。その状況を見てみたい。

皇太子及び皇族男子は、成年に達し、若しくはそれに見合う年齢に達したら陸海軍の軍人になることが義務づけられていた。一方、華族にはそのような義務はなかった。

1 軍務を志願した皇族

征討総督や兵部卿だった小松宮彰仁親王は、天皇に嘆願して、陸軍少尉となり、親王の弟伏見宮貞愛親王も天皇に願い出て、陸軍幼年学校に入校した。

両親王が軍務に就くことを願ったのは、明治6年6月の徴兵令公布が影響したのであろうし、諸外国の王族が軍務に就いていることを知り、その必要性を痛感したのであろう。政府としても両親王の志願は歓迎すべきものだった。

2 皇族身位令

明治6年12月、皇族たちに対し、「皇族今より陸海軍に従事すべく仰せ出され候条・・・」との宮内省通達が発せられた。

明治初期には幼かった皇族等も成長するにつれ大半が陸海軍いずれかに入るようになる。皇族が軍人となる義務が明記されたのは、皇族身位令（明治43年3月施行）であり、「皇太子、皇太孫は満十年に達したる後、陸軍及び海軍武官に任ず。親王・王は満十八年に達したる後、特別の事由のある場合を除く外、陸軍又は海軍の武官に任ず。」（同令17条）とされた。

3 皇族軍人の概要

明治から大東亜戦争の敗戦までに、日韓併合後皇族に準じる待遇を受けた朝鮮王公族3名を含め、48名の皇族が軍人になっている。陸軍：28名、海軍：20名であった。

適齢に達しながら軍人にならなかった皇族は5名であるが、何れも身体的・精神的な面での特別の事由があったとされる。

4 華族の軍人は

軍人となる華族が余りにも少ないことにしびれを切らした天皇は明治14年4月“少壯の華族はなるべく陸海軍の軍人になれ”との勅諭を与えた。為に、特別コースが設けられたりして入学するも途中で辞める者が多かった。その後の状況でも、華族で軍人になった者は華族全体からするとごく僅かである。軍務に就くという法的義務なく、華族には職業選択の自由が認められていたのである。

5 大東亜戦争に従軍された皇族軍人等

(1) 満州事変後、大陸に出征した陸軍の皇族は8名であるが、日米英蘭戦開始後大陸に渡ったのは、春仁王と天皇の末弟である三笠宮崇仁親王である。直宮で戦場を体験したのは崇仁親王のみである。

(2) 海上勤務に就いた皇族は、久邇宮徳彦王のみである。臣籍降下して華族となっていた元皇族の海軍軍人の3名が前線に赴いた。

(3) 伏見宮第四王子博英伯爵の戦死 1938(S18)年8月21日、蘭印セレベス島付近で搭乗機が米軍機に撃墜され、戦死。近代日本で皇室に生を受けた者として初の戦死。音羽正彦侯爵は、1939(S19)年、クエゼリン島で陣頭突撃敢行して壮烈な戦死。尚、厳密な意味では戦死ではないが、北白川宮永久王は、1940(S15)年9月4日内蒙古戦線において飛行機事故で死亡

(4) 戦犯容疑者として梨本宮守正王は巢鴨に収監されたが、後釈放された。

6 処遇 優遇され、軍も相当気を遣ったのは事実のようだ。

* 戦後の日本では、所謂エリート層はノブレス・オブリージュが忘れられていないか？



第百三十七話 至誠は通ず！

手元に、本日購入した「日本の誇り 103 人」(光明思想社刊 岡田幹彦著)がある。産経新聞に連載(平成 21 年 1 月から毎週一回)された「元気の出る歴史人物講座」103 話が単行本化されたものである。その 103 名中には軍人(明治以降)が 26 名挙げられており、うち 10 名が大東亜戦争に従軍している。本メモランダムで既に紹介したのが、栗林忠道(39 話、46 話)、今村均(129 話)、大西瀧次郎(53 話)、中川州男(29 話)、牛島満(名前のみ、69 話)である。残る 5 名は、藤原岩市(66 話で一部紹介)、岡田資、柳川宗成、黒木博司及び仁科関夫である。今話では、大東亜戦争の戦争目的達成に寄与した二名藤原岩市及び柳川宗成を簡単に紹介することにする。一部 wiki 等から関連事項を追記している。残る二名は次話に譲る。



1 藤原岩市陸軍少佐(士 43 期)：インド独立の母と讃えられた藤原機関(20～21p)

F 機関長藤原少佐は、マレー半島進撃中、投降英軍のインド兵によるインド国民軍を結成し、これが後のインド独立の礎となった。投降兵との親睦を図るため、インド料理による機関員とインド人将校との会食を催した。初めて口にする激辛の料理を、インド人に倣い手掴みで食べた。インド人将校はこの藤原の態度に感激し、「敵味方、勝者敗者、民族の相違を超えた暖かい催しこそは、一昨日来、我々に示されつつある友愛の実践と共に、日本のインドに対する誠意の千万言に優る実証」と将校代表は述べた。インド独立第一の英雄と仰がれるチャンドラ・ボースとも肝胆相照らす仲となった。差別意識のない、誠意ある態度こそ、全てに優ることを教えてくれる。

尚、ボース率いるインド国民軍は、日本軍と共にインパールに進撃して敗れた。然し、この祖国解放の戦いを敢行したことが、結局インドの独立を導いた。

また、後に F 機関を発展解消して岩畔英雄を長とする岩畔機関を作ったことを付記しておく。

2 柳川宗成陸軍大尉：インドネシア独立戦争を支えたもの(148～149p)

インドネシアは、4 年間の対オランダ独立戦争を戦い抜き、独立を果たしたのは、昭和 24 年である。この戦いの中核は、日本軍が創設した祖国防衛義勇軍であり、この義勇軍の基礎になったのが、タンゲラン青年道場である。その隊長こそが 16 軍参謀部の柳川宗成中尉である。昭和 18 年 1 月、インドネシアの青年 50 人と寝食を共にし、一体となって猛訓練を続けた。訓練開始に当たり、「一日一刻も早く我々から学び得る全てのものを学び、強く、正しく、新しいインドネシア青年に生まれ変わって貰いたい。そして、諸君自らの手でインドネシアを解放して貰いたい。今日からは私が諸君の父だ。各班長は母と思え。その他の教官は全て兄弟である。何事もよく相談せよ。」と訓示した。人種差別を受けてきた彼等に人間として対等に接し、兄弟扱いして呉れる柳川等の誠意に、青年達は心から感激し、逞しい戦士として新生した。軍事訓練とともに重視されたのは精神教育であり、そこでは日本軍の軍人勅諭が用いられ、祖国のための自己犠牲の尊さ、闘う勇氣などについて、インドネシア人青年は徹底的に教え込まれた。

* 最近でこそ人種差別には厳しい非難が浴びせられるが、大東戦争当時は、人種差別が横行していた。日本人も酷い目に遭ったのは記憶に新しいし、同盟国の総統は激しいレイシストであったし、敵国大統領もそうであった。パリ講和会議(1919)で「人種差別撤廃」を提案したのは他ならぬ日本であった。日本が完全無欠だったとは云わないが、他の諸国に比較すれば日本人ほど、寛容な者は居ない。相手に対する誠実さ、差別なき真の愛情、惻隱の情は、必ず相手に通ずるものである。この二例はそれを示している。

(第百三十七話 了)

第三百三十八話 烈々たる殉国の想いが我が国の名誉を守った

前話では陸軍軍人を探り上げたが、今回は海軍軍人である。日本軍初の特攻兵器である、所謂人間魚雷と云われる「回天」に携わった二名の海軍軍人を探り上げる。

1 回天とは

「回天」という名称は、幕末期の軍艦「回天丸」から取って命名したとも云われるが、開発に携わった黒木博司中尉は「天を回らし戦局を逆転させる（天業を既倒に挽回する）」という意味で「回天」という言葉を使っていた。

1944年（昭和19年）7月に2機の試作機が完成し、11月20日のウルシー環礁奇襲で初めて実戦に投入された。終戦までに420基が生産された。回天は超大型魚雷「九三式三型魚雷（酸素魚雷）」を改造し、特攻兵器としたものである。回天はこの酸素魚雷を改造した全長14.7m、直径1m、排水量8tの兵器で、魚雷の本体に外筒を被せて気蓄タンク（酸素）の間に一人乗りのスペースを設け、簡単な操船装置や調整バルブ、襲撃用の潜望鏡を設けた。炸薬量を1.5tとした場合、最高速度は55km/hで23キロメートルの航続力があつた。ハッチは内部から開閉可能であつたが、脱出装置はなく、一度出撃すれば攻撃の成否にかかわらず乗員の命はなかつた。

回天が実戦に投入された当初は、港に停泊している艦船への攻撃、すなわち泊地攻撃が行われた。最初の攻撃（玄作戦）で給油艦ミシネワが撃沈されたのをはじめ、発進20機のうち撃沈2隻、撃破（損傷）3隻の戦果が挙げた。米軍は、この攻撃を特殊潜航艇「甲標的」による襲撃と誤認し、艦上の兵士はいつ攻撃に見舞われるかという不安にかられ、泊地にいても連日火薬箱の上に坐っているような戦々恐々たる感じであつたという。しかし、米軍がこまめに防潜網を展開するようになり、泊地攻撃が難しくなつてからは、回天による攻撃は水上航行中の船を目標とする作戦に変更された。



2 黒木博司海軍中尉：回天特攻が創案された理由（164～165p）

回天を創案し、回天特攻の訓練に全身全霊の超人的な努力を傾注し、昭和19年9月6日、訓練中に真先に殉職したのが黒木博司海軍中尉（死後少佐）である。黒木は、大東亜戦争を日本の天命と捉え、「神武肇国以来の最大国難」と見、「一度敗れなば、永久に世界より抹殺される」と観じたという。それ故、日本を滅亡させないためには「必死の戦法」を採る以外なしと思つたと云う。回天特攻を自ら敢行することにより、海軍を挙げて航空特攻に立ち上がる礎たらんと願つたのである。

「今や今死もて仇（あだ）うつ他（ほか）に何皇国（すめくに）護る道あらめやも」

3 仁科関夫海軍中尉：我が国の「有条件降伏」を導いた回天将校（166～167p）

訓練中に殉職した黒木少佐の遺志を受け継いだのが、盟友、仁科関夫海軍中尉である。黒木と肝胆相照らした仁科は指導教官として後進の訓練に全力を尽くした。

昭和19年11月8日回天特別攻撃隊菊水隊が出撃した。第一回出撃者12人は仁科が選んだ。先頭に立つのは仁科である。全員「七生報国（しちしょうほうこく）」と墨痕鮮やかな白鉢巻きを締め、仁科は黒木の遺骨を納めた白布で包んだ小箱を首につるした。部隊の全員、基地である大津島（山口県徳山市）の人々、女子挺身隊らがこみ上げる嗚咽を懸命にこらえて見送つた。11月20日、菊水隊はウルシーに停泊する米艦隊郡に突入した。12艇中5艇が突撃に成功、数隻を瞬時に撃沈した。仁科は先陣を切り見事命中した。時に21歳であつた。

「君が為只一筋の誠心（まごころ）に当たりて碎けぬ敵やあるべき」

* 青年のこの純粋な殉国精神に感動せぬ者はなかり。軍事的効果は兎も角、大和男子の心意気が世界の感動を呼び起こし、日本の名誉は保たれたのだ。忘れてはなるまじ。

（第三百三十八話 了）

第百三十九話 戦友会の今とこれから

本日(2019/10/26)全国ソロモン会の令和元年度慰霊祭(・総会)(於:靖国神社)に参列させて頂いた。数多ある慰霊・顕彰団体の中でも屈指の活動実績を誇る同会であるが、御遺族のみならずより若い世代の参列者が多かったことに感動を覚えた。戦友会はどうなっているのだろうと思い、少々調べてみた。御遺族の高齢化・ご逝去もあり大きな転換点に差し掛かっているようだ。

1 戦友会

戦友会とは基本的には、帝国陸軍及び海軍の元軍人を中心に組織された民間団体であり、同一部隊や戦場で従軍した将兵及びその関係者で構成されている。戦友会の目的は、戦没者の慰霊・顕彰、遺骨の帰還事業及び親睦等である。

2 戦友会の組織原理

戦友会は、同じ釜の飯を食った同一部隊の将兵と戦没者のご遺族等で構成される場合と、同じ戦場で苦難を共にした将兵と戦没者のご遺族で構成される場合が多い。また、厳密な意味では戦友とは言えないにしても、軍学校等における同期生等をもって構成される場合もあれば、シベリア抑留者が収容所単位で組織した会、更には出身地単位の戦友会もある等多様多様である。部隊レベルも連・大隊単位から師団、軍レベルと多様だ。

3 団体数について

戦後の1953(S28)年頃から多数の戦友会が誕生し、最盛期には数千とも云われる。ある調査では、1980年約1300団体、1983年約1600団体とも。

全国組織として、全国戦友連合会(1968設立)があったが、2002年に解散した。1990年代以降、会員の高齢化や逝去によって、活動停止や解散を迎える戦友会が増えている。名だけの団体もあるやに仄聞する。その一方、本日参加したソロモン会のように若い世代が事務局を担い、活発に活動している団体もあるが、それは希少だ。

4 活動内容

活動は、戦没者の慰霊と会員相互の親睦が主である。本日慰霊祭を齎した全国ソロモン会の活動内容を紹介する。①遺骨帰還事業(政府派遣の帰還事業参加、遺族会等の帰還事業への協力、JYMA等の協力を得てカバー戦域の調査及び帰還事業) ②慰霊巡拝の実施 ③慰霊祭 ④会誌等の発行 ⑤関係団体、関係国等との交流 ⑦その他
(委細は同会のHP <http://www.japan-solomon.com/>)



5 今後の課題は

短期的には、会勢の拡大若しくは維持が課題である。従軍将兵御本人やご遺族の逝去や高齢化により活動困難となりつつある団体も多い。お孫さんや志ある若者が会員として参加している団体もある。今後、如何にして、戦友会の想いや活動を若い次世代に継承するかが問われている。日本国民の心奥深く眠っている英霊への感謝と敬意を掘り起こす秋来ると確信する。

戦没者の慰霊・顕彰や遺骨の帰還事業は本来的に国家の事業そのものだ。もう少し、本腰を入れて取り組んで頂きたいものだ。特に遺骨の帰還事業は、残された時間は僅かと云える。神速の解決を切望する。

このような中長期的課題もさることながら、活動が困難となりつつある団体への何らかの支援策をも検討すべきではなかろうか?

また、大東亜戦争とは何だったのか、日本は如何に戦ったのか、それらがあってこそ今日の繁栄と平和があること等を、戦争を知らない若い世代に啓蒙することが肝要だ。

- * 遺骨帰還事業の完結なくして日本の戦後は終わらず、英霊の慰霊・顕彰なくして日本の再生はないと信ずるがどうだろうか?

第四百十話 鉄道連隊：鉄道建設に任じた陸軍部隊

第六十一話「知られざる壮大な夢と頓挫」で大東亜共栄圏の骨幹交通路、大東亜縦貫鉄道を紹介したが、それを請け負ったのが、鉄道連隊である。国内外で現在も使用されている路線を含む多数の鉄道を建設した。その鉄道連隊について述べる。

1 鉄道建設部隊の創設と拡大

日清戦争後に、占領地への軍用資材をスムーズに補給する必要性が議論され、独の例に倣って、1896 (M29) 年「鉄道大隊」が編成された。義和団の乱では、臨時鉄道隊が編成され、日露戦争では、京義線建設の監督、安奉線や新奉線の軽便鉄道建設等に任じた。日露戦後の1907 (M40) 年に鉄道連隊に昇格した。

連隊は、連隊本部 57 名、三個大隊 (HQ、3 個中隊 (107 名))、材料廠合わせて 1091 名であった。(1940/7 時点)

2 第一及び第二鉄道連隊の転戦

1 連隊は、1896 (M29) 年鉄道大隊として、陸軍士官学校内に創設され、中野を経て、連隊に昇格後、津田沼 (現習志野市) に移動、そして 2 個連隊増設時に 1 連隊は千葉 (都賀村作草部) に位置した。関東大震災鉄道復旧債業に従事したほか、満州、中国華北・華中で鉄道占領・運営に任じた。1943 年、隷下 2 個大隊を蘭印に転用。千葉公園は連隊の作業場跡

2 連隊は、1 連隊 3 大隊を以て編成。編成地津田沼。関東大震災復旧作業の他、満州・華北を転戦した。1945 年主力が九州に移転、連隊正門は千葉工大にあり国の登録有形文化財に指定



3 第三連隊から二十連隊

1 又は 2 連隊を母体に、逐次に編成された。支那事変間に編成された連隊はわずか 4 個連隊のみであり、1944 (S19) 年に 8 個連隊、1945 (S20) 年に 5 個連隊が新設された。

4 今も現役の路線も

戦地のみならず国内各地でも訓練を兼ねて鉄道建設を請け負った。建設費は、材料費のみ負担するだけだったので、鉄道事業者から重宝されたという。

(1) 現在も活用されている路線

- ①東武野田線 ②久留里線 ③西武新宿線 (高田馬場～東村山) ④身延線
- ⑤小湊鉄道線

(2) 廃線

- ①成田鉄道多古線 (1946/10 廃止) ②成田鉄道八街線 (1940/5 廃止)
- ③夷隅鉄道 (1927/9 廃業) ④西武大宮線 (1941 年廃業)
- ⑤福島交通飯坂東線の改軌・電化 (1971 年廃業)
- ⑥庁南茂原間人車軌道 (1909～1926)
- ⑦中島飛行機専用線 (1944/10) 三鷹駅～武蔵製作所、東久留米～田無製作所
空襲で破壊
- ⑧東京急行電鉄代田連絡線

世田谷代田駅～新代田駅 戦時中に敷設・使用され、戦後まもなく撤去

(3) 外地

- 北樺太軽便鉄道、南満州鉄道安奉線 (満鉄)、
- 京義線 (1905 年開通ソウル～新義州約 500 km、現在は 38 度線で分断)
- 泰緬鉄道 (1943 年開通 バンコク～ヤンゴン)、スマトラ横断鉄道 (220 km)

* 軍事目的とは言え、インフラ整備に寄与した功績は大きい。

第百四十一話 米戦略家が摘出した日米戦決定過程の教訓

米戦略家が、日米戦に至る過程を検証して幾つかの教訓を摘出している。その教訓には成程と思わせる説得力があり、我々の自省の糧として或いは、現代安全保障を考えるうえでの示唆を与えてくれる。それを紹介して、小生なりのコメントを述べたい。

1 7つの教訓

- ①恐怖心とか誇りといった感情は意思決定上の重要なファクターになる。そうした感情に合理性があるか否かは関係がない。
- ②潜在敵国の文化や歴史についての知識は極めて重要である。
- ③相手国への牽制が有効であるか否かは牽制される側の心理に依存する。
- ④戦術よりも戦略が重要である。
- ⑤経済制裁は、実際の戦争行為に匹敵しうる。
- ⑥道徳的或いは精神的に相手より優れているとの思い込みは敵の物理的優位性を過小評価させる。
- ⑦戦争が不可避であると考えたと、自らその予言を実行してしまいがちになる。



2 ①について

10倍する大国と如何に対峙するかについて、第百二十一話でも述べた永野軍令部総長の「戦うも亡国、戦わざるも亡国、戦わずして国滅びた場合は真の亡国、・・・」（以下割愛）に端的に示されている。太った豚よりも脊せたソクラテスを選ぶのが国家としてのプライドだ。

3 ②について

日本は米国民の戦争介入反対感情を真に理解していたか、また、米国民は長期持久の厳しい作戦に耐えられないとの思い込みが戦争指導構想に滲んでいる。大和魂があると同様にヤンキー魂もあったのだ。リメンバーパールハーバーを予期し得なかった？

4 ③について

ルーズベルトの誤算は、日本の南進を牽制すべくハワイ真珠湾に艦隊を集結させ、フィリピンに戦略爆撃機を展開し、経済制裁を加えれば日本の行動を抑止できると考えたことだ。米国の脅威には実効性があると日本に思わせ得ると考えた。ルーズベルトは明確な意思を日本には伝えていない。

5 ④について

本話で幾度も指摘したように日本の戦争指導には、大戦略が欠如している。北に備え、支那で戦い、そのような状況下で米英蘭に挑むのは、どう見ても愚策である。

6 ⑤について

国家の生存を脅かすほどの経済制裁は、窮鼠猫を噛むになる。日本は石油の対米依存度が8割であり、石油の禁輸は死の宣告に等しい。

7 ⑥について

日本人が優秀であると同様に米国民も優秀なのであって、米国民を余りにも軽んじていたかもしれない。物的国力の絶対的劣位を精神力でカバーする以外に方策はなく、出来ると思いたかった。それが過小評価へと繋がった。

8 ⑦について

日米戦必至の機運は日米双方にあったように思える。小生は運命論者ではないが、結果的には運命に引き摺られるようにして日米は戦わざるを得なかった。

* 戦争には錯誤があり思い込みがあり誤解がある。それを思い知らされる。

(第百四十一話 了)

第百四十二話 台湾で神になった日本軍兵士

寡聞にして承知しておらず、不明を恥じる。「大東亜戦争秘録 鎮魂の旅」（早坂隆著 中央公論社刊）に収載されている美談である。第六十五話でも取り上げた台湾沖航空戦（1944（S19）年10月12日～15日）で撃墜された日本海軍飛行兵曹長（戦死後少尉）が村を救ったとして祀られているのである。日本軍兵士が外地で祀られている唯一の例である。1999（H11）11月22日に起きたT-33A入間川墜落事故と同様のケースである。

1 飛虎將軍廟の概要

○ 正式名称：鎮安堂 飛虎將軍廟（飛虎は戦闘機、將軍は兵士の尊称）

○ 所在：台南市南区同安路127号

○ 祭神：日本海軍軍人 杉浦茂峰

（杉浦茂峰略歴 1923～1944 水戸市出身 乙種飛行予科練に入隊 零戦三二型機でF86Fと交戦、撃墜され戦死（20歳）（1944/10/12））

○ 建立：1971年 殉職地に程近い四坪の地に祠

1993年 拡張計画「飛虎將軍廟」決定、造営

○ 維持管理：地元住民 朝夕二回彼がヘビースモーカーだったこともあり、煙草を線香替りにお供え。祝詞として「君が代」「海行かば」を奉歌



2 村への墜落回避行動を住民目撃、そして感謝

杉浦兵曹長は、来襲する多数の敵機を迎撃すべく発進、壮絶な空中戦が展開された。杉浦の搭乗した零戦も被弾、尾翼から火を噴き、みるみる高度を失ったと目撃者は語る。落下する機体は「海尾寮」という名の大きな集落に向かっていった。その光景に現地の人々は「村が大変なことになる」と瞬時に思ったという。杉浦は落下傘で緊急脱出できるタイミングだったが、彼は村への墜落を回避すべく、愛機を懸命にコントロールしようとした。

程無くして、村人は感嘆の声を挙げた。戦闘機の軌道が明らかに変化したことに気付いた。辛うじて機種を上げ、体勢を僅かに立て直した機は、そのまま村の東側を通過して郊外の畑地の方角へと蛇行しながら飛び去った。此処において杉浦は漸く脱出、落下傘を開いた。その直後機体は空中で爆発した。

間一髪で脱出に成功した杉浦だが、彼の背後に肉薄したグラマンが猛烈な機銃掃射を加えた。彼は地面に叩きつけられ、絶命した。「養殖池の近くでした。彼の身体は、仰向けになって倒れていました。両手両足を広げて、まるで漢字の「大」の字のようでした。」と語る。名前は、「杉浦」と飛行靴で知れるのみであった。

戦後、村人の間で不思議な夢を見たという噂が流布し、“白い服を着た日本の若い軍人が枕元に立”ったのは、杉浦であろうとされ、地域の守り神にお伺いを立てたところ彼を祀る祠を立てるべしとの御託宣があり、祠建立となったのである。

3 祠建立の背景

李鴻章が化外の地とよんだ台湾は下関条約（1895年）によって日本の統治するところとなった。日本の善政は台湾住民に受け容れられ、日台関係は良好であった。これが杉浦への感謝ともなったのであろう。

外省人による放火事件があり、また抗議もあった由。が、祠建立後、村は豊作に恵まれるなど天祐が続いた。今なお、参詣者が絶えないと云う。神像が2016年には里帰り

* 日台関係の一層の親密化を切望するものである。また、今に続くパイロットの心意気に感動を覚える。

（第百四十二話 了）

第百四十三話 文明の衝突？（BC級裁判、日吉事件）

BC級戦犯裁判に係る記録等を読むと、サミュエル・P・ハンチントンの「文明の衝突」を思わずには居られない。百四十二話で紹介した書籍「大東亜戦争秘録 鎮魂の旅」所収の「B29搭乗員を介錯した武士道の顛末」には現代的な意味における安楽死問題も絡み、日本と欧米諸国との文明の衝突を考えさせられた。以下簡単に所謂「俘虜斬首事件」を紹介する。

1 本土空襲墜落米機搭乗員の取扱と俘虜斬首事件

大東亜戦争末期になると、米軍の本土空襲は熾烈さを増した。（第五十四話参照）しかしながら、撃墜された米軍機もかなりの数となり、落下傘降下した搭乗員が俘虜（捕虜）となった。600人に近いとも云われている。

このような中で起きたのが、所謂俘虜斬首事件、又は日吉事件(エムリー事件)とも称される。

○関係者：満淵正明中尉（神戸出身、元神職）147師団426連
隊第1大隊第1挺身中隊中隊長

○場所：千葉県長生郡日吉村（現在の長柄町榎本）長栄寺

○発生年月日：1945年5月26日（土）

○事件経過：

米軍のB29戦略爆撃機が千葉県長生郡の日吉村の田に墜落した。11人の乗組員の内、4名即死、5名はパラシュートで脱出、2名が重傷であった。重傷の2名と4体の亡骸は、長栄寺にリヤカーで運ばれた。

長栄寺では駆け付けた大隊付の軍医が重傷者二名の診察に当たっていた。軍医は、これ以上の手当ては出来ないとして立ち去った。重傷の一名は死亡、重傷のエムリー少尉も恢復の兆しがなく、危篤状態が続いた。

同日午後、満淵は、痙攣を繰り返す少尉の様子を見るに忍びなく、部下の曹長と「介錯」の必要性について議論していた。が、遂に決断し、曹長に楽にしてやれと命じた。首の皮一枚を残しての正しい作法通りの介錯が行われた。

○戦犯裁判：1946(S21)年1月下旬、満淵は巢鴨拘置所に拘束、4月5日から裁判

新聞記事には「介錯は是か非か」「戦犯公判で日本武士道の論議」との見出しの記事が掲載された。4月20日判決 絞首刑

○双方の主張

検事側：常識的に残虐行為という他なし、人道に反する。

弁護側：介錯は復讐ではない。助かる見込みなく、斬首して楽にする行為が武士道、他の5名の生存者には危害を与えていない、鄭重に埋葬した。

○尚、日本政府・軍は、彼等が国際法に定められた捕虜ではなく、無差別爆撃を行った戦争犯罪人であると見なしていた。

2 論点は？

(1) 介錯は安楽死か？ 本人の同意なき介錯をどう判断する。

(2) 安楽死は許されないのか？

(3) 安楽死の方法としての介錯の適否は？

(4) 但し、少尉の亡骸で刺突訓練を見習士官が実施させた。住民が見守る中での介錯は、復讐の要素もある？

* 軍事法廷自体に対する批判はさておき、BC級戦犯裁判も検察側の一方的な主張のみを採り上げた裁判であることは明らかだ。日本文化に対する理解なき、一方的断罪である。勿論残虐行為が全くなかったとは云わないが、・・・冤罪も多かったろう。

(第百四十三話 了)



第百四十四話 終戦直後に起きたこと

「玉音放送」に一時的に動揺が広がった陸海軍部隊であったが、大部分の部隊は粛々と復員に向けて動き始めた。しかし、一部の部隊では徹底抗戦の動きを見せたり、あるいは逆に、規律が弛緩して無断離隊や軍需物資横領が発生したりするなどした。「徹底抗戦」を叫ぶ陸海軍将兵は全国各地に大勢いたものの、全体的には天皇陛下のご命令に無条件で従う「承詔必謹」が大勢であった。また狂信的右翼も騒擾事件を惹起させた。これらの騒乱は、その行動の稚拙さ等から判断すれば、多分に同時多発的な暴発であったのだろう。

1 宮城事件

1945(S20)年8月14日深夜から15日に掛けて、一部陸軍省勤務の将校と近衛師団参謀が、玉音放送阻止を狙いに起こした事件。森近衛第一師団長殺害、師団長命令を偽装して近衛歩兵連隊を動かして宮城占拠するも、東部軍の鎮圧により失敗した。



2 厚木航空隊事件

8月15日、厚木海軍飛行場で海軍航空隊が起こした騒乱事件。徹底抗戦を主張するも、6日後に鎮圧された。

3 狂信的右翼による事件

(1) 国民神風隊事件

佐々木武雄予備陸軍大尉が、宮城事件に呼応すべく、出身校たる横浜工業専門学校の有志を募り、首相官邸と時の内閣総理大臣鈴木貫太郎の私邸などを相次いで焼き討ちにする事件を起こした。

(2) 愛宕山事件：徹底抗戦を主張する右翼団体が内大臣邸を襲撃するも失敗、愛宕山に籠城し、徹底抗戦派に蜂起を呼びかけるも呼応する者なく、8月22日警察が強制排除、集団自決

(3) 松江騒擾事件：8月24日、松江市で青年グループ「皇国義勇軍」数十人が武装蜂起し、県内主要施設を襲撃した事件。この事件により、民間人1名が死亡。

(4) 川口放送所占拠事件

8月24日、抗戦派の予科士官学校等の青年将校によって、関東全域のラジオ電波の発信元であった川口放送所と鳩ヶ谷放送所が占拠され、約9時間放送が停止

4 一部将校が引き起こした事件や不穏行動

(1) 水戸教導航空通信師団事件

教導隊の一部将校と同志が上京し、終戦阻止の蜂起に加わろうとした事件である。17日上京、近衛師団と接触するも奏効せず、部隊を撤収帰隊。首謀者は自決を余儀なくされた。

(2) 少壮参謀の皇太子奪取構想や埼玉県児玉の陸軍航空部隊の不穏行動があった。

(3) 西部軍の幻の徹底抗戦論

九州は独立して連合国に徹底抗戦しようという動きがあった。その準備の一環として、筑紫野市の山中には、「軍司令部壕」として、7本の地下壕が突貫工事で、造成されたが、軍管区司令官の決断で独立構想は潰えた。

<https://www.sankei.com/region/news/151215/rgn1512150061-n1.html>

5 高級指揮官の自決等

(1) 阿南惟幾陸相割腹自決：ポツダム宣言受諾を受け、8月15日に大臣官邸にて

(2) 田中静老東部軍司令官：宮城事件及び川口放送所占拠事件を鎮圧後に司令官室自決

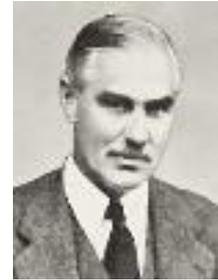
(3) 宇垣中将(第5航空艦隊司令長官)等による特攻：8月15日、部下と共に特攻

* 茫然自失、反発・徹底抗戦、胸中の思いとは別に陛下の命を承詔必謹するは美德

(第百四十四話 了)

第百四十五話 ポツダム宣言と国体護持、そしてグルー前駐日大使

1945(S20)年7月17日から、ベルリン郊外ポツダムにおいて、米、英、支の三国首脳が会談し、WW2の戦後処理について話し合った。7月26日に発表された三ヶ国の共同声明は対日降伏要求の最終宣言であり、ポツダム宣言と称される。これを受けた日本側が、降伏は止むを得ないとしても、この一点だけは譲れないと拘ったのが国体護持である。米主導のポツダム宣言作成に日米開戦時の米駐日大使であったジョセフ・クラーク・グルー(1932/6/14~1942年6月?駐日大使)が関与している。



1 ポツダム宣言策定に至る経緯

カサブランカ会談(1943/1)以降、米F・ルーズベルト大統領は、英及び政権内の異論を抑え込む形で無条件降伏に固執した。ル大統領の後を受けたトルーマンも無条件降伏方針を引き継いだ。その内容は明確でなく、早急に対日降伏勧告を具体化する必要に迫られた。当時、米国は原爆、日本本土上陸作戦及びソ連参戦を考慮していた。

米国務省内の政治的解決を模索するグループは、日本が受け入れ可能な降伏可能案を提示して降伏に応じさせる「条件付き無条件降伏」を提案していた。

2 三人委員会による対日勧告文の検討と強硬・親中派の巻き返し

政治的解決模索派は、天皇制を保障した降伏勧告案をトルーマン大統領に提示(5/28)、ホワイトハウスで日本本土上陸作戦が検討されたが、まず政治的解決をとの意見が大勢となり、三人委員会(陸軍、海軍、国務省の検討委員会)で具体的討議が始まった。(6/19)

三人委員会では、対日計画案が提示(6/26)され、実際の勧告文を策定する小委員会を立ち上げた。天皇制保障の文言を入れるべきかどうかで議論は紛糾した。7月2日、「現皇統による立憲君主制を排除しない。」との文言の入った修正草案を決定し、トルーマン大統領に提出した。

7月3日、対日強硬派であるバーンズが国務長官に就任し、省内の親中派も巻き返しを図った。バーンズは、天皇制保障条項を一旦削除することを考え始めたと云われる。

7月6日、ポツダムに向かうバーンズ長官にグルー国務次官は天皇制存置条項を入れることを働きかけたメモを渡した。原爆投下の機会を逸することを恐れたバーンズは、原爆投下までは降伏条件の緩和は棚上げすべしと大統領に説いた。代表団員ではないスティムソン陸軍長官も大統領を説得したが奏功しなかった。斯くて知日派は敗れ、天皇制に言及しないポツダム宣言が発出された。

尚、1945年6月の世論調査では、33%が天皇の処刑を、17%が裁判を、11%が生涯拘禁を求めている等極めて厳しかった。

3 日本の反応

7月27日、政府は宣言の存在を論評したが、マスコミは反発した論評を載せた。政府は、「国体護持」が明確ではないとしており、記者会見をした鈴木首相は、所謂「黙殺」と述べた。(黙殺は ignore や reject と訳されたが、この訳は正しかったのだろうか?) 連合国は「黙殺」を受諾拒否と受け取り、広島・長崎への原爆投下(8/6, 8/9)、ソ連の対日参戦(8/9)と、戦局が一気に悪化した。

日本政府は御前会議において激論の末、8月10日午前2時半に、「国体護持」を条件にポツダム宣言受諾を決定した。

4 吉田茂のグルー評価

本当の意味の知日家で、「真の日本の友」であったと高く評価している。

* 国体護持が明確ならば日本が直ぐに受諾した可能性はあり、原爆投下もなかった?

(第百四十五話 了)

第百四十六話 リトルボーイ、ファットマン&パンプキン

「ハロウィン=カボチャ(パンプキン)のお化け」からの発想で、パンプキン爆弾を思い出したので、大東亜戦争末期の米国の原爆について簡単に纏めた。

1 原爆投下の経緯等

1942 (S17) 年 10 月、枢軸国の原爆開発に焦った米国ルーズベルト大統領は、アインシュタイン=シラードの手紙や原爆に関するレポートを検討し、英・加の同意を得て、科学者を総結集して原爆開発を行うマンハッタン計画を始動させた。リーダーは物理学者のロバート・オッペンハイマー、研究所はロスアラモス、ウラン精製工場オークリッジ、プルトニウム生産場所はハンフォードである。

原爆の使用対象として日本が決定されたのは、1943 (S18) 年 5 月である。

広島への原爆投下決定は 1945 (S20) 年 5 月 10 日、長崎市は小倉市の予備目標地として 7 月 24 日に決定された。他に、京都市や新潟市が候補地になっていた。

2 開発状況及び投下

(1) ウランを用いた原子爆弾 Little Boy

ウラン 235 を用いたガンバレル型(二分されたパイプの両端に置かれたウラン 235 の塊の一方を火薬の爆発力でもう一方のウラン塊にぶつけて、臨界量を超過起爆する方式)の原子爆弾の開発は進んだが、実験は為されなかった。抑々ガンバレル型の原爆は安全性に問題があるとされる。設計内容等については機密扱いで明らかではない。この原爆のコードネームが「リトルボーイ」(Little Boy)である。



7 月 16 日テニアン島に運ばれ、7 月 31 日リトルボーイの組み立て完了

8 月 6 日 0815 広島市上空 9 6 0 0 m から投下された。核出力は TNT 換算で約 15kt (5.5 × 10¹³ ジュール) である。

(2) プルトニウムを用いたインプロージョン方式の原爆 Fat Man

プルトニウムを用いた原爆開発は、ガンバレル型とインプロージョン方式が進められたが、1944 年にインプロージョン方式で開発が継続された。

1945 (S20) 年 7 月 16 日、ファットマンのプロトタイプであるガジェットを用いて人類史上初の核実験トリニティ実験が敢行された。

Fat Man 型の原爆はまず 3 個が製造され、1 発が長崎に投下 (8/9/1102)、核実験のクロスロード作戦(ビキニ環礁での核実験)でも使用された。出力は TNT 火薬換算で 22,000t (22kt) 相当で、「リトルボーイ」の 1.5 倍の威力であった。

Fat Man 自体は、戦後も生産が継続され、1947 年兵器廠には使用可能な 13 発が備蓄され、1949 年までに 120 発が生産された。改良型の生産は 1949 年からである。

(3) パンプキン爆弾

Fat Man の特異な形状(コードネームからの想像出来よう。)の空中挙動を確かめるため、通常爆弾を装填した同型・同重量の模擬弾を製作して、投下訓練の一環として日本に対して実戦投入された。投下目標は、原爆投下候補地の京都市、広島市、新潟市及び小倉市そのものを除いた周辺都市であった。

1945/7/20 富山市、長岡市、福島市、東京都へ計 10 発投下を皮切りに 18 都道府県 30 都市に 50 発が、7/20 から 8/14 に投下された。原爆投下前はフェーズ 1、その後はフェーズ 2 とされた。フェーズ 2 は、戦後における有効利用性の確認を行うテストだったが、費用対効果から不採用となり、テニアン島に残っていた 66 発は海中破棄された。

* 京都市に対する爆撃回避の理由は、文化財保存の観点からではなかった。悪魔の兵器を今後どうするか、理想と現実の狭間で、世界が悩んでいる。

第百四十七話 統一されていない「終戦」概念

一口に終戦と言っても、様々である。我々には常識でも、全く考えの異なる者も居る。我々の常識では、8月15日が終戦記念日であり、それ以外はないと思っているが、果たして、どうなのだろう。呼称も日付も異なる色々な終戦がある。統一されていないのは、色々な思惑が絡み合っているからだろう。終戦について考えてみたい。

1 呼称の様々

小生は「終戦記念日」と言っているが、良く気を付けてみれば「終戦の日」というマスコミもあり、口の悪いものは別の言い方をする。

(1) 終戦記念日、終戦の日、敗戦記念日（又は敗戦の日）、降伏記念日（又は降伏の日）等がみられる。色々な思惑が見え隠れする。

(2) マスコミ等（以下のように区分されているようだ。）

「終戦の日」派：NHK、テレビ朝日、フジテレビ、TBS

「終戦記念日」派：時事通信、共同通信、毎日新聞、読売新聞

両方使用派：日本テレビ、朝日新聞、日経新聞

(3) 記念日との語彙を使用しない理由は、「記念日」との語彙にはお祝いの要素が感じられることから抵抗感があると云うことらしい。総理談話等では「終戦記念日」だ。

2 日付

我々は何の疑いもなく8月15日と考えているが、色々な見方がある。

抑々、「終戦」とは何か？「戦争当事者間の戦争終結合意」が終戦であることは事実だが、終結合意を何時の如何なる事象をもって捉えるかで日付が異なる。

(1) 8月15日 日本人の一般的常識、（国民が斉しく終戦を認識した日）米英支のポツダム宣言受諾を受け入れることを表明した終戦詔書を玉音放送により国民に周知した日

(2) 8月14日 日本がポツダム宣言受諾を連合軍各国に通知した日、終戦詔書の日付もこの日である。

(3) 8月16日 日本軍に対する停戦命令が発せられた日（自衛のための戦闘行動以外停止）

(4) 9月2日 降伏文書に調印（即日発効）した日

(5) 4月28日 サンフランシスコ平和条約発効（国際法上正式に戦争状態終結）



3 関係国の終戦日

(1) 米、英、仏、加： 9月2日を対日戦勝記念日、記念イベント等あり

(2) 中国：9月3日（2014年に9月2日の翌日を独自の対日戦勝記念日と決定）

厳密には日本の支那派遣軍と国民政府は9月9日に降伏文書調印、対日戦の当事者ではないと思うのだが・・・

(3) 露、ソ連：ソ連は、9月2日は北方領土侵攻発動日であるので、翌日の3日にした。露は2010年に9月2日を戦争終結日と決定（連合国の一員をアピールするとともに、北方領土支配を正当化せんとする狙いもある由。）

4 学校教科書

小中学校の教科書：8月14日か8月15日が殆ど

高校の日本史：多くが9月2日を終戦の日としている。

5 政府の公式的見解はなく、8月15日を「戦没者を追悼し平和を祈念する日」と定めているが、言外には、8月15日を終戦記念日と認めていると考えて良いだろう。

* 法的手続き上、終戦は9月2日だろうが、当事者間の合意があった8月14日も有力だが、心情的には8月15日こそが終戦記念日に相応しいと思う。

（第百四十七話 了）

第百四十八話 戦時徴用船と戦没船員

大軍の作戦の成否は、戦略輸送の適否如何による。広大な戦域への部隊輸送と資源地帯からの内地への物資輸送は、民間船舶に頼らざるを得なかった。支那事変は兎も角、日米英蘭戦開始後は、民間船舶の徴用も急激に増大し、船団護衛の発想も当初はなく被害は陸海軍人を上回った。戦時徴用船の状況を確認する。尚、写真は観音崎にある「戦没海員の碑」である。



1 支那事変

陸軍が、華南の作戦において、日本の漁船を徴用して、狭い水路での兵員や物資輸送に活用したと云われる。海軍も、徴用漁船を揚子江河口封鎖に運用したという。また、陸軍部隊の支那大陸への戦略輸送には民間船舶が徴用されたであろう。細部未確認

2 日米英蘭開戦後の徴用

(1) 民間徴用船の最初の犠牲

マレー上陸作戦で最も困難な任務を負ったコタバル上陸部隊は、佗美支隊で、兵力は約5500名、これを輸送する輸送船「淡路山丸」「綾戸山丸」「佐倉丸」はいずれも優速船であり、「佐倉丸」は防空基幹船として重武装していた。3隻合わせた搭載舟艇は約60隻、一回で2000人を輸送する能力があった。この作戦で三井船舶の淡路山丸が銃爆撃を受け12月12日沈没した。

(2) 民間船舶・船員の被害状況

民間船舶の被害は、日本海員組合の資料等によれば、以下の通りである。

官・民一般汽船	3,575 隻
機帆船	2,070 隻
漁船	1,595 隻
合計	7,240 隻

商船及び船腹量の変化 (数百トン以上の船舶)

日米英蘭開戦時	商船数 2,445 隻	船腹量 639 万総トン
終戦時	商船数 1,217 隻	船腹量 134 万総トン (運航可能船は 80 万)

戦没船員数は、60,609人とされる。船員の損耗率は43% (推計) とされ、陸軍の23.7%、海軍の16.5%と比較しても高いと云わざるを得ない。若い世代(14~20歳)の損耗率が高い。

(3) 甚大な船舶被害の要因

戦域の拡大に伴う膨大な人員・物資輸送、過密な船舶乗船者、護衛作戦(当初は護衛なく、爾後は貧弱な態勢)、決められた航路航行、船団の装備貧弱等が指摘されている。

(船団護衛については百十五話 お粗末なシーレーン防衛参照)

(4) 陸軍暁部隊は、機帆船を徴用し、海軍は漁船を「特設監視艇隊」(「黒潮部隊」等)として運用した。

(5) 戦時中の船舶は全て「船舶運営会」が管理し、その中から陸・海軍が傭船した。この際における陸海軍は船舶量の配当を巡り、熾烈な戦いを繰り広げた。詳細は割愛

(6) 戦時中の船腹増加

戦時中に約400万総トンを建造したとされるが、「戦時標準船」と言われる粗悪なものであったという。

蛇足ながら、終戦後も日本軍及び米軍が敷設した機雷による被害が続出した。2000人を超えるとも云われる。戦没船員の方々のご冥福をお祈りする。合掌。

*戦略輸送を如何にするかは現代的課題でもありと確信する。

第百四十九話 第二の苦難！

敗戦に伴う戦後処理の第一は、外地に居る軍人・軍属及び一般居留民の本国帰還である。軍人・軍属の場合は復員・引揚であり、一般居留民の場合は引揚である。終戦時、約 650 万（資料によっては、688 万人、660 万余）という大量の日本人が海外に居た。米英蘭豪中ソの占領地域からのこれら日本人の引揚はどのように行なわれたのか？引揚が、関係国の思惑や国際政治に翻弄される。

1 概要

- (1) ポツダム宣言 9 項で日本軍の復員は明確に規定されていた。政府は、GHQ に復員に関する支援要望等を提出した。一般居留民は、当初は現地での共存に努力する「現地定着」方針(狙いは財産保護)であった。GHQ は軍及び居留民の引揚に関する基本指令を発し、日本の要望を受けて、軍を優先するも、現地善処を可とすることとなった。

1946(S21)年 7 月末には、ソ連軍占領地域を除く各地域からの引き揚げは完了見込みとなり、この時点で軍人約 310 万人が帰還、未帰還者は殆どソ連地区であった。一般邦人については、約 314 万人が帰還した。

- (2) 軍人・軍属

内地所在部隊の復員業務は、陸軍が 1945(S20)年 10 月、海軍は同年 8 月末までに完了した。

外地に居る 350 万の軍人・軍属の復員は、米軍管理地域から始まり、順次中国軍、豪軍、英軍の核管理地域へと実施され、1948 (S25) 1 月までに一応完了した。英軍管理地域では、13 万 2000 名が作業部隊として一年間残留させられた。



- (3) 海外からの引揚者数の推移

1946(S21)年末までに 500 万人以上に達し、47 年にはさらに 74 万人余が引揚げた。密出国数を含めると 600 万人以上と推定されている。

- (4) 引揚指定港

引揚指定港はトータルで 18 港であった。引揚の進展に応じて順次指定が解除され、1950(S25)年以降は舞鶴港のみとなり、1958(S33)年 11 月迄使用された。

うる覚えながら、引揚者に関するラジオ放送が昼頃に行われていたのを思い出す。

- (5) 引揚船

復員船(特別輸送船)として、旧海軍艦艇(航空母艦、巡洋艦、潜水母艦、海防艦)72 隻、日本船舶 55 隻の他、アメリカ貸与船舶 192 隻(リバティ船、LST)が運用された。海軍艦艇は急遽改造された。中国本土からの引揚には中型駆逐艦、海防艦等が担っていた。横浜山下公園前に係留されている大型豪華客船氷川丸(国指定重文)も。

- 2 南方地域については、英軍地域及び蘭印地域においては強制的に日本軍を労働残留させた。英：13.2 万、オランダ：1.3 万名、後米国の説得の応じ日本送還(二次復員)
- 3 中国：軍人・邦人 280 万の処遇について、折から国共紛争もあり、中国は日本の軍事力のみだけでなく技術力の「遺産」活用を望み、留用(第 74 話参照)方針を採った。が、米国は早期送還を求め、中国が折れ、日本も全面引揚方針へと転換した。送還政策は国民政府の責任で、大陸各地から港までの輸送は中国が、港から日本までは米国担当となった。米国は船舶も提供した。(既述)
- 4 ソ連からの復員・引揚：非道なり。50 万とも 65 万もの抑留者数(第 27 話参照)
- 5 帰還そのものも苦難の連続だった。惨たり。失意、疲労困憊、栄養失調、疫病(コレラ発生もあり)、死亡、携行品の極端な制限、帰郷しても更なる苦難が待ち受け
- 6 復員を担当したのは、軍が消滅したため、第一・二復員省、復員庁そして厚生省。
- * 測り知れぬ御苦勞に敬意と謝意を！未だ帰還せざる御遺骨の早期帰還を切望。

(第百四十九話 了)

第百五十話話 一応の総括所見

思いつくままに、テーマは特に定めずに書き始めて何時の間にか百四十話を超えてしまった。次話が決まらないので、此処まで書き進んだ段階における小生なりの総括をしてみたい。

1 陸軍だけが悪かったのか？

陸軍悪玉、海軍善玉が定着した感があるが、今までの話題を通じて、陸軍は確かに悪かった、多くの過誤を犯した。海軍は必要以上に善玉論が流布されてしまった。問題が無かった訳ではない。所謂二元論から脱却すべきだ。二元論は非生産的だ。

2 軍隊のみが悪かったのか？ 軍に迎合し、或いは煽った勢力はなかったか？ 彼等の責任をも追及されるべきだ。責任転嫁ではなく、自らの責任を直視すべきだ。

3 日本の政軍関係は、日清・日露戦争までは機能したが、昭和期に至ると、政・軍を調整すべき元勳等の人材不足もあり、システムの包含する欠点が顕在化した。

4 一部の指導者の責に全てが帰せられるのか？

大戦略を立てられる人材は日本では育たないのか？ 真のエリート教育が為されていなかったのではないか？

5 米が悪かったのか？ 確かに米に追い詰められた感はあるが、追い詰められた側にも大なる判断ミスがあると云うべきだ。大戦略において日本は見劣りする。

6 独ヒットラーの本質を日本国民の殆どが見誤ったと思える。

7 大東亜宣戦を通じて信用ならない無道・非道な国家を列挙し得る。今もその本質は変わっていない。如何に付き合うか、考量すべきだ。

8 日本軍隊は精強無比であり、将兵は軍紀を遵守し、国を思い、家族を思って敢闘した。それは世界史上に燦然と輝いている。勿論、一部において許容し得ないケースがなかったとは云わないが、・・

9 日本的な意思決定：意見・主張の相違点を明確にせず、曖昧なままに言辞で誤魔化して当面を糊塗、爾後それが亀裂を生み拡大し、致命的となった。

10 何かをしなければ、今のままでは駄目だと思いつつも、重大局面を打開する策を決断し得ない。重大決断が出来るエリートの育成が肝要だろう!!

11 持たざる国は悲しい。故に精神力に過度に依存。少ない資源を分捕りあう愚。それを前提とした戦略こそが求められる。天佑神助に期待すべきではないのだ。

12 日本は果たして大東亜戦争を総括したのか？ 日本（人）の弱点や問題点を至当に摘出してそれを活かしているか？

13 確かに戦争は悲惨であり、可能な限り避くべきではあるが、自存自衛のために決然と立つことも有りうる。でなければ真の亡国となる。瘠せたソクラテスの方がまだ。

14 二正面、三正面作戦が愚策とは知りつつも、何故かそれに向かって突き進む愚。

15 積極・強硬論が大抵の場合、議論をリードして、消極論を圧倒、大勢となる傾向大

16 既定方針に捉われて、状況の変化に応じた柔軟な戦略転換等が困難だった。図体が大きいので当然と云えば当然だが、だがそれにしてももう少し柔軟性が欲しいと痛感。

17 刷り込まれた所謂「自虐史観」からの脱却には時間を要するようだ。

18 今日の我が国が享受している繁栄と平和は、大東亜戦争の尊い犠牲の上にあるのであり、英霊・戦没者への感謝と敬意を再確認すべきだ。そういう時代に我々は居る。

19 昭和以降の歴史（正史）を日本として確定すべきではないか？ 押し付けではなく自らの意思で歴史を確定すべきだ。

20 戦没者慰霊の国家施策化及び戦没者の帰還なくして日本の戦後は終わらない。

そのような運動を起こすべき秋に来た。